
外見ファクター～エステヘG o！～

おせろ道則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外見ファクター → エステヘGO! →

【Zコード】

Z9092D

【作者名】

おせろ道則

【あらすじ】

綺麗になりたい。好きだった男の子に、綺麗な姿になつてもう一度会いたい。大学の同級生に告白して、振られてしまつた、紗枝。いつもなら、うじうじしてヤケ酒に走るのに、今回は違つた。彼女は決意する（さて、何にでしょ？）

第一話 ソーセージは決意する（前書き）

この作品は「はじめての×××。」の企画作品です。
紗枝のような、どこにでもいる女の子はこんなにがんばれるんですね。
最後まであたかく見守つていただければ幸いです。

第一話 ソーセージは決意する

扉を開けば、かんから缶空かんかん。

「……」

からんからんと転がつて、ドアから外に出た空き缶を栄次は黙つて拾い上げた。

玄関先からそこはもう、ビール缶とチューハイ缶の、雑多な舞踏会場だった。

栄次はべつに驚きはしなかつた。

メールで呼び出されたときから、嫌な予感はしていたのだ。
しかし……鍵もかけていないなんて。

無用心すぎると、栄次は思った（もちろん、こんな寒い冬の日で、マンションの前で待ちぼうけをくらうよりかは、よかつたが）。

まあ、この無用心さには、わけがある。

玄関口の空き缶が、その理由を説明している。

そう、彼女は失恋したのだ。

そして、ヤケ酒は「彼女」の得意技だ。外で飲んで、さらに部屋でも飲んだに違いない。

それも、一人で。

「女の一人ヤケ酒なんて、するもんじゃないぜ」

栄次は疲れたふうにため息をついて、靴を脱いだ。

もちろん、ここは栄次の部屋ではない。

そして、栄次の恋人の部屋でもない。

栄次の大学のクラスメート、紗枝さえの部屋だ。

栄次はコートとマフラーを脱いだ。台所を通り過ぎ、薄暗い廊下を進んだ。

通り過ぎる際、台所のコンロの上にも、飲み干したチューハイ缶があつた。

それを横目に、奥の部屋につながるドアを、栄次は開いた。

昼間だというのに、部屋は夕方のように薄暗い。

次にひとひとした空便是 少したじにわ 汗をかいた

この薄暗い

透光カーテンかほんと陽の光をシャッターワンしている
すかにこぼれる光で、栄次は部屋の中を見回すことができた。
するに、部屋の隅で、何かがうごめいていた。

「ふつと
部屋の隣で
何かかしこめいた

榮次は思わず小さく声を上げた。

部屋の隅に、ふくらんで丸まつた布団が、
栄次は黙つてゆつくりと布団に近づいた。
しかし、歩くたびに空き缶に足があたり、
ガラガラと音をたてた。

じれつたくなつた栄次は、遠慮せずガラガラと空き缶を蹴飛ばしながら、そちらに向かつた。

右回の前で脇をおこす

栄次は困ったように、丸まつた布団を見つめた。
それはドイツ名産のホワイトソーセージにも似ていた。
彼女の体は、頭からすっぽり布団にくるまれていた。
布団は、じつと、栄次の言葉を待っていた。

「……またフラれたんか?」

ソーセージは何も言わない

弟次に黙一に引かれてからこの返事を得た。

「大崎君……」「そんなんじゃないつて

「あたし…… フラれたんだねえ」

彼女はいつた。

111

フォローはもう抜きにして、栄次はちょいと、布団の口を持ち上げた。

パジャマ姿の紗枝が、うつむきで泣き伏していた。
布団が持ち上げられたので、寝ているわけにもいかないと思ったのか。

紗枝はゆっくりと起き上がりつて、鼻をすすつた。

一体どれだけ泣いたのだろう。

紗枝のまぶたは、かなり重たそうだった。

でも、泣き疲れていても、まだ泣きたらないようだった。
しゃくりあげるように肩を震わす彼女を、栄次は見つめた。
真正面から、紗枝の姿を、じつと見つめた。

長いまつげ。

かわいらしい丸顔。

肩が小さい。

栄次は黙つて、なおも紗枝を見続けた。

うす茶色のねこつ毛。

前髪を横に流して、肩をくすぐるようなボブカットヘア。

その髪を少し乱して、涙をいつそう目に浮かべ下を向いていたが、
紗枝は不意に顔を上げた。

じつと栄次を見つめ、紗枝は小さく口を開いた。
いよいよか。

栄次は思つた。

そう、これは、二日酔いの彼女が、栄次に抱きついてくる予兆だ。
紗枝はいつも、誰かにフランするたびに、酔いつぶれ、最後に男友達の栄次を呼びつけ、泣きながら抱きついてくるのだ。
それは、失恋からの復活の儀式のようなものだった。

栄次はそれを待つっていた。しかし

「ダイエットしてやる！」

紗枝が、睨みつけるようにして、栄次にいった。

「は？」

栄次！ もうヤダ！ 死にたい！

という、いつもの泣き言は？

栄次はぽかんと紗枝を見た。

「あたし、痩せるわ。

そこで、もつときれいになつて、大崎君よりいい男とめぐり合つて、

今度こそお付き合つするのよ」

布団を吹き飛ばし、紗枝はその場で立ち上がつた。

「何よ、私だつて女よ

「いや、うん。 そうだよ」

「だから絶対綺麗になるんだから」

だから意味が分からぬ。

栄次は思つたが、それ以上に、紗枝の意氣込みに驚いた。

「いつもと違つじやん」

紗枝は栄次をキッと見つめた。

「もうね、こんな風にフЛАれるたびにヤケ酒して、スタイルも崩れていつて……

そんな自分が、つづづく嫌んなつてきたの」

「ほうほう

ヤケ酒のたびに慰め役に呼ばれる、俺の身の上に気づかには無しかい。

栄次は心の中で愚痴をこぼした。

「それに……栄次にも悪かつたよね。

毎回呼び出されて迷惑だつたよね、『ごめん』

紗枝は急にしゅんとなつて、謝つた。

……テレパシーつてあるのかな。

栄次は思つた。

「いや、俺のことはいいんだけど」 栄次はいつた。

「確かに、それは前向きだよなあ」

栄次は驚きを入り混じらせて、彼女をほめたたえた。

「私は生まれ変わるのよ」

紗枝はいった。表情が生き生きしていた。

栄次は納得するよう、「うなずいた。

「じゃあ変わつてみようか」

栄次はいい、ゆっくり腰を上げた。

そして紗枝の両肩に、手を置いた。

えつ？

紗枝は栄次の顔を見上げた。

すると栄次は、紗枝の両肩を下に押し、もつ一度布団の上に座らせた。

ありや。

紗枝は、栄次を少しでも意識した自分を恥じた。
じつと紗枝の目を見て、栄次はいった。

「で。じゃあ、とりあえずどんなん」として、瘦せよつと思つてんの
？」

「そうね」

紗枝はいった。

「まずはじやあ、流行の＊＊＊、ダイエットでもー。」

「おやめなし」

「何人よ」

「体に無理がかかつて危険だつて」

「そんなこと無いよ」

「そんなことあるんですね」

栄次はいった。

「一品、ダイエットとか、栄養学から見たらよくなきに決まつてゐるだ
る。」

それにそんなダイエット、一生続けていけるのか？

やめたら、大体リバウンドするのがオチだよ」

紗枝はぐつと言葉をのみこんだ。栄次はいつも正しくて、どこか
意地悪だ。

栄次はメガネをはずして、メガネ拭きで綺麗にふいた。

「瘦せるにしても、健康的でないと、後々いいことないぜ」

「あう・・・・・・」

反論できずに、紗枝は栄次を憎々しそうに見つめた。

「にらむなよ」

「にらんでません」

栄次はメガネをかけなおした。

「続きがあるんだから」

紗枝はきょとんとして、栄次を見た。

栄次は、部屋に散らかっている空き缶をひとつ、ひょいと手にとつた。

それを紗枝と自分の間に、ちゃんと置いた。

「何?」

いぶかしげに、紗枝が尋ねる。

「誓いの儀式」

「はあ?」

紗枝は笑おうかと思つた。

しかし、栄次の表情は真剣だった。

紗枝は思わず、しゃんと背を伸ばした。栄次の言葉の続きを待つた。

「本気できれいになりたいんだな?」

栄次がいった。

「……うん」

「フラれて落ち込んで、ヤケ酒するような女には、もうなりたくないんだな?」

「うん」

「努力は惜しまないか?」

「惜しまないわ!」

「よし」

栄次は、紗枝の両肩をぽんぽんとたたいて、いった。

「俺の姉貴を紹介しよう」

第一話 夢の中でも彼女はとれあく

体の重みが感じなり、まるでやわらかな水の中に浸つてゐる感覚。紗枝はおもむると、布団の中で寝返りをうつ。枕に顔を押し付けて、紗枝は幸福なまじろみを感じていた。

そして彼女は夢を見る。

夢の中では、いくつもの思い出が混ざり合ひ、理路整然としない物語に変わつてゐる。

あたしは……

紗枝は夢を見ながら、少し瞼を震わした。

あたしは、自分でいつのもなんだけど、とりたてて普通の女の子だと思う。

大学で、素敵な恋を始めたい。

彼氏と街を歩きたい。

楽しくてドキドキしたキャンパスライフを送りたい。

そんな思いで、あたしは実家を離れて、ここ京都の大学で、一人暮らしを始めたの。

田舎から京都に出てきたあたしは、それだけで、最初とつてもわくわくした。

赤レンガづくりの小さなキャンパスは、あたしに幸せな学生生活を約束してくれる場所の ようだった。

新しい生活。新しい友達。

興味ある授業。面白い先生。

高校とは違つた、新しい世界。

あたしはもう、大学生活すべてがとつてもキラキラして見えた。
そしてあたしは、予告どおりに、恋をした。

初めて好きになつたのは、テニスサークルの先輩だった。

高校でもテニス部だったから、そのままテニスをしようと思つて入つた。

でもそこは、コンパサークルといったほつが正しくて、毎週末サークルのみんなで呑みに いつてた。

その中で、副部長の先輩が、とってもかっこよくて。

あたしは、飲み会で先輩と隣になるたび、どきどきしていた。
サークル仲間はみんな仲がいい。この勢いで、きっと付き合え
るんじゃないかと思った。

そして告白したけど……ダメだった。

先輩には、好きな人がいた。

あたしは泣いた。

フラれた後、あたしは誰もいないテニスサークルの更衣室で一
人泣いた。

その夜、大学生なんだからお酒で失恋を癒そうと、あたしは近
所のスーパーでお酒を買い 込んだ。

部屋で飲みつぶれ、酔つた勢いで、同じクラスの栄次にメール
をした。

ああそうだ。栄次と仲良くなつたのは、あれがきっかけだった
んだつた。

お酒つてのはすごいね。

普段しそうに無いことを実現させてくれるんだから。

同じクラスメートといつても、栄次のついてあたしはあんまり
いい印象をもつてなかつた。

いつも前の席に座つて、先生の話をじつときいて。

メガネが妙にインテリくさくて、あたしの肌には合わなかつた。
地味でもないけど、イマドキでもない。

それが栄次。

大学に入ったすぐのとき、新入生歓迎コンパでたまたま隣になつて、場のノリでメルアドを交換した、それだけの間柄だつた。

突然のメールで、栄次はびっくりしたかもしれない。

でも、その一時間後に、奴は本当に、あたしのマンションに来た。

奴が玄関を開けたとき、ゆるゆるジーンズにトレーナーというお家ルックで出迎えたあたしを見て、栄次はふきだして笑つた。あたしは憤慨して、そのまま栄次を部屋に連れ込んだ。

そして、先輩にフラれたいきさつを、栄次にとうとう語つた。あたしは、こんなに辛い失恋は初めてだと栄次にぐちつた。

あたしの部屋で、栄次はきちんと正座をしていた。うなずきながら、真剣に話を聞いてくれた。

いい奴だ……

初めて栄次をそう思った。インテリ君が、寡黙ないい人君に変わつた瞬間。

でも、やつぱりここつは嫌味な奴だと、後で訂正しなおすんだけどね。

それは置いておいて、あたしは……本当に失恋が辛かつた。

高校のときより、失恋が辛くなつた。

あまりの辛さと、先輩とのこれからの一気まずさに、あたしは頭を悩ませた。

それで大学のサークルは辞めちゃつた。

それからあたしは、ちょっと太つて、少しだけ社交界に疎くな

つた。

半年を過ぎて、それからあたしは、ゆっくりと失恋の傷を癒していった。

そして、今度はもっと好きな人に出会った。

大崎君。

あたしは彼を好きになった。

大崎君を好きになったのは、同じ授業で、ノートを見せ合いつぶになつてから。

あたしたちは、同じ授業では、よく隣に座つた。
お互い授業はまじめに受ける方だつたけど、それとは関係のない事もあたしたちはたくさん話した。

彼はいつもおしゃれで、話題はとても、イマドキだつた。
さわやか好青年な顔をしていて、笑うと、歯並びのいいきれいな白い歯がのぞいた。

先輩後輩問わず、大崎君の評判はとてもよかつた。

「大崎君、かーわいー」つて、先輩が一階の窓から、下校する大崎君に手を振るの。

大崎君は、はにかんで、手を振りかえしていた。

後輩は、年下という特権をフルに活用して、「大崎せんぱーい」つて、無用にくつづいてくる。

大崎君はテレながら、それに抵抗していなかつた。

あたしは、そんなことはできなかつた。

大崎君を好きになつても、そんなオープンに、彼にアタックするなんてできなかつた。

大崎君を間近で見ていられるだけで、あたしは満足だつた。

ノートを[写]しているとき、あたしの前には、大崎君がいる。
あたしは、ノートを[写]しているふりをして、大崎君を見つめる。

綺麗な黒髪。

お洒落なヘアカット。

短髪がとてもよく似合ひ。

ああ、好青年だ……（大崎君ラブ）

夏場では、半袖Tシャツで大崎君は、またかっこいい。
程よく筋肉のついた、綺またた身体。

居酒屋のバイトをしているって言つていた。何をしても大崎君
は素敵だと思った。

あたしは、高校でも何人かと付き合つたけど、こんなにドキド
キしたことはなかつた。

確かに、先輩にも相当ドキドキしたけど、大崎君を好きになつ
ていくことに、先輩の失恋の痛みはいつの間にか消えていった。
そしてますます、大崎君への思いは募つて……

大崎君には、現在彼女がいないのを友達から確認して、あたし
は放課後に、彼を体育館の 裏に呼んだ。

がんばりました。もう一度の勇気でした。

そして……またもや玉砕したのでした。

*

「なんて……いやな夢だ」

紗枝は枕に顔をうずめて、獣のように、うなりをあげた。

朝日がまぶしい。

『ジリジリジリジリ』

目覚まし時計がなつていて。午前7時ジャスト。

「何でこんな時間になるのよ」

土曜日の朝早くに、何があるつていうの。

紗枝は苛立ちを覚えながらスイッチを押した。

「まつたく……」

寝なおしてから、十五分。

紗枝はガバリと起きた。

「そうだ！ 栄次に呼ばれていたんだつたよー。」

紗枝は急いで、洗面所にどびこんだ。

第二話 決めたからこなで踏み出だす

JR京都駅の中央入口前。

そこの両側には、右は京都劇場、左は高島屋につながる長いエスカレーターがある。

その真下から外をみれば、冬の澄んだ青空の下、京都タワーがそびえたつている。

紗枝は寒さで震えながら、栄次が来るのを待っていた。

しかし、京都タワーの塔頂を見つめるのも、もつて五分。紗枝の耐寒数値は限界に近づいていた。

約束時間が過ぎたのに、栄次が現われない。

「さ～む～い～」

紗枝はダッフルコートの首元をぎゅっと締めた。

一月の終わりは、冬でも一番寒い時期だ。

この寒さは骨に沁みる。これこそ盆地地帯の風物詩。極寒の京都の土曜の朝だ。

「おそい！ なんで来ないのよ」紗枝は非難めいてあたりを見渡した。

すると、右手の京都劇場の方から声がした。

「ごめん、遅れた」

バイクを押しながら栄次が近づいてきた。

「栄次」

紗枝は怒りと同時に、驚いた。

紗枝は栄次がバイクに乗る事を、この日初めて知った。

「ちょっと待つててな。これ、駐車してくるから」

そういうと栄次はバイクを押して、駐車場の中に消えていった。

へー。栄次、バイクに乗るんだ。紗枝は思った。イタリアの映画に出てきそうな、脚こぎバイク。

今日の栄次は、黒の皮パンツに、茶色の皮ジャケット。

バイカーサングラス。それに似合つヘルメット。

「ふうん」

紗枝は感心したふうこつなずいた。大学とはずいぶん服装が違うじゃない。

なんだ、本ばかり読んでる、嫌味な「もやしち子」じゃあなかつたのね。

「お待たせ」

栄次がようやく紗枝のところにやつてきた。

「寒かつた」

紗枝はぶうたれでいった。

「ごめんつて」

栄次は笑つて、缶コーヒーを紗枝に渡した。

「わ、買ってきてくれてたんだ。ありがとう」

「ま、飲みながら行くか」栄次はいって、歩き出した。

「ねえ。それより、どこにいくの?」

紗枝はきいた。

「ダイエットの聖地へ」

「はあ?」

「いいからついてこいよ。俺の紹介だから、安心しなさい」

栄次はそれだけいと、すたすたと先へ進んだ。

紗枝は、怪訝な顔をして、栄次の後へとついていった。

*

栄次は駅前のショッピングモールを抜けて、繁華街に進んでいった。

そこを通り過ぎ、公園や寺院の連なる大通りの歩道をすたすたと歩いた。

一〇分、二人はそのまま真っ直ぐ歩き続けた。

そして、栄次はまだまだ先へと進んだ。

大通りから小道に入り、入り組んだ京の町並みをずんずん歩いた。途中、栄次は大学の授業や試験について、紗枝に話しかけた。別にここで話さなくてもいい会話だつた。

「彼は今から行く所については、何も話してくれなかつた。
「ねえ、栄次。それよりどこに行くの？」紗枝は何度か聞いた。
「まあまあ」

「といって、栄次はなおも勝手に先に進んでいく。
紗枝は段々、だまされているような気がしてきた。
紗枝は栄次の背中を見つめて、思つた。

「栄次つて、いつもあたしをおちょくるのが好きな奴だ。
今回だつて、呼び出しておいて、どこに行くのかも教えてくれない。
もしかして……歩きまわつたあげく、「これが運動」とか言つた
りして？」

「あたしつて、栄次のおもちゃ？」

紗枝は失恋で、少々、被害妄想気味だつた。

みんな、また、あたしを馬鹿にするのかな？
今朝の夢といい、なんなのよ、みんな。
……なんだか惨めになつてきただよ。

紗枝はじつと、栄次の背中を見つめたまま、涙ぐみはじめた。
そのとき、栄次がくるりと後ろをふり向いた。
紗枝はどきりとした。

「なに？」栄次が尋ねた。
「いえ……」紗枝はいつた。
「いぶかしんでるな？」
栄次はにやつと笑つていつた。

それを見て、紗枝はぴくりと眉を痙攣させた。

紗枝は立ち止まつた。そして、下を向いて、黙り込んだ。

栄次は面白がつて、背中を曲げて、覗き込むように紗枝の顔を見ようとした。

すると紗枝はすつと顔をあげ、栄次を正面から見つめた。

「…」栄次はどきりとした。

「……」

紗枝は栄次を見つめながら、思い直した。

確かに、いつもならくつてかかるところだけど、

「一生懸命努力して、綺麗になる」と宣言したのはあたしで、栄次はそれを手伝うといつてくれているんだ。

信じなくちや。

「ううん。別に。頼りにしてるよ」

紗枝はいつて、自ら先へとずんずん進んだ。

「栄次。ほら行こう!」

「……おう」

栄次は白い息を吐いて、紗枝の後ろ姿を追いかけた。

*

それから更に歩くこと十五分。風が出てきて、二人は身を縮こまらせた。

「うう、寒い」紗枝はいった。

雨が降つたら、確實に雪になる気温だつた。

「もうちょっとだよ。あ、ここだ」

栄次が紗枝を呼んだ。彼は、ひとつビルを指差した。

「何? 第五ナガタビル?」

紗枝はその十階建てのビルを見上げた。

そのビルは真新しく、大通りから少し裏手に入つたところに建つていた。

百貨店や繁華街が近い割に、人気は少ない。

「ここのは階な」

栄次はにつこりと微笑んだ。

二人はビルの正面玄関を抜け、緑色の廊下を進んだ。

突き当たつて右手にあるエレベーターの前に着いた。栄次が上行きのボタンを押した。

エレベーターが来るまで、栄次はゆうゆうと鼻歌を歌っていた。紗枝には、これは意外な展開だつた。

ちょっと待つて、お洒落なショッピングがあるようなビルでもないしむしろ企業用のビルじゃないの？

栄次はあたしをどこに連れて行くの？

そうこいつ思つてゐるうちに、エレベーターが下りてきて、扉が開いた。

「ほら。乗つて乗つて」

栄次は紗枝をボックスの中に押し込んだ。

栄次は八階のボタンを押した。やはりご機嫌な表情だ。

「栄次……そこに何があるのよ？」

たまりかねて聞いたそのとき、紗枝はぎょっとした。

栄次が隣にいないのだ。

「ち、ちょっと待てー！」

紗枝はあわてて、閉じかけたエレベーターの扉を、両腕で強引に押しとどめた。

「おいおい！」

エレベーターから降りていた栄次は、扉をこじ開ける紗枝をびっくりして見た。

ぎぎぎと扉を押し広げ、紗枝が、怯えと怒りを入り混ぜていった。

「ちょっと？ 栄次は来ないの？」

「ここから先は、男人禁制なのです」

ちーんと栄次は合掌し、仏のような顔立ちで、紗枝を見てふふつと笑う。

紗枝は呆れてぽかんとした後、栄次をにらんだ。

「何よそれ」

「行き先は姉の職場」

「ええ！」

「大丈夫。姉貴に話はつけてあるし。

嫌だと思ったら、すぐに断つて帰つてくれればいいさ」

「ちょっとう、何それ、余計に怖い」

紗枝は涙声になつた。

「達者でな〜」

ひらひらと手をふる栄次の姿は、もうくも扉に遮断された。紗枝を乗せて、エレベーターは上へとあがり始めた。

*

『ボーン。八階です』

調子の外れた、明るい電子音。

「うつ〜」

エレベーターの壁に手を着け、紗枝はうなだれた。

しかし、着いた以上、先へ進まなくては、話が弾まない。

「仕方ない」

紗枝は覚悟を決めて、八階フロアに降り立つた。

第四話 着いた先で、HTセトラ

エレベーターを降りると、紗枝はまず異変に気づいた。

「何？ すごいいい香り」

どこからともなく漂ってくる花の香りが、八階全体を包んでいた。ここは一体……？

紗枝はどきどきしながらあたりを見回し、また正面に向き直ると、細い廊下の向こうに小さな看板がひとつ見えた。

結婚式のウェルカムボードのような、かわいらしい看板が。

『 ひめらへどうぞ 』

と指示している。

矢印がおりに右に曲がると、とつぜん豪奢な扉が目の前に現れた。

「わっ」

紗枝は一瞬、目がくらんだ。

精巧なガラス細工でほどこされた、まばゆいばかりに、輝く扉。扉の前には、傘立があった。竹製の編みカゴで、亀甲編みがとても美しい。さらに木彫りの小鳥とバラがそこにちりばめられている。なんて綺麗……

紗枝は感動してほうつとなつた。

こんな素敵な扉と傘立の前に立つていると、その雰囲気に乗じて、どこからかせせらぎの音が聞こえてきそうだった。

すると

「 しゃわしゃわ 」

ええ！

紗枝は耳を疑つた。

今、確かに聞こえたわ、澄んだ小川のせせらぎが！

紗枝はあわてて目をこすつて、落ち着いて目の前の物を凝視した。扉と傘立ては、本物である。そして小川はどこにもない。

「びっくりした。なんで小川のせせらぎが……」

紗枝は自分の耳をもみながら思つた。

でも、本当に信じられない。都会のビルの一室に、こんな情緒あふれた場所が存在していたなんて……

紗枝は扉を見つめ、その奥を想像した。

段々と紗枝の胸の中で、不安よりも扉の先を見たいという好奇心がうずいてきた。

思い切つて紗枝は、その秘密の園につながる扉を押し開いた。

「カラーンカラーン」

鈴の音が鳴り響き、扉の向こうから、花の香りがいっぱいに吹いてきた。そのさわやかな風が、紗枝の頬をなでて去つた。

花の香りの出どころはここだったのね。

花の香りに慣れると、あたりがクリアに見えてきた。

紗枝は中を見回した。彼女はちょうど今、玄関口に立つていた。品のいい、こじんまりとしたカウンターが、玄関口のすぐ先にあつた。

『御用の方は、このベルをお鳴らし下さい』と、美しい文字で書かれたポップと、教会で見かけるような鐘が、手のひらサイズで金色に輝いている。

紗枝は靴を脱ぎ、中に入った。きょろきょろとあたりを見回した。

部屋全体は、ブルーが基調なのね。なんて爽やかな……

さらに周りを見てみると、右手奥と左手奥に、ギリシャ建築調の扉があつた。

この建物の造りを想像すると、右手の方に、たくさん部屋がありそうだった。

壁のいたるところに、細長い全身鏡がはめ込まれていて、いつで

も自分の姿が見えるようになつてゐる。

紗枝はカウンターの奥をのぞき見ようと体を伸ばした。

しかし、カウンターの奥はブルーのカーテンで仕切られていて、中は見えない。

しかし耳を澄ませると、その奥から、ショアリーのよくな可愛らしい声が響いてゐる。

紗枝はもう、先ほどまで寒空のなか外を歩いていたのを忘れそうだった。

「は！ いかんいかん」

紗枝ははつと、また我に返り、もう一度慎重に部屋の隅々を見渡してみた。

きちんとそろえられた、お洒落で柔らかなスリッパ。
みずみずしく育つた、観葉植物。

その隣には、モダンなガラステーブルと、豪華なソファ。
そしてガラステーブルに置かれているのは、真空保存のバラの花。
左手の壁にかけられてゐる絵画。

「これは……シャガール」

紗枝は感動で、胸が熱くなつた（彼女はシャガールの大ファンだつた）。

そして、その隣には、美顔機のポスター。
あれ。

壁にインセットされた棚の中。化粧水とクレンジングが。
うるる。

棚の下段、美容液のテスターと、顔パックの試供品が。

「…………」

紗枝は、たらたらと汗をかき始めた。
後ろの壁の角を見た。

ランジェリーを着た、頭の無いマネキン人形が立っている。

このあたりで紗枝は、秘密の園は、秘密なものではなかつたことを理解し始めた。

あしからず、紗枝はこの世界をまったく知らないわけではない。だが、来たことは一度も無かつたのだ。

「か、帰ろうかな」

と、思つたとき、誰かが紗枝の左手を、かしつと掴んだ。

「ひやっ」

紗枝は驚いてそちらを振り向いた。そして衝撃を受けた。

「今井、紗枝さん、ですね？」

彼女の唇からは、深い花の香りがした。

紗枝の右手を掴んだ相手は、目もくらむような、美女！小顔で純白の肌をした、一重の瞳が大きい女性が微笑む。髪はオレンジブラウンで、艶やかで長い巻髪（もちろん綻）。アンジェリーナ・ジョリーのような豊満な胸に、すっと伸びた、ハル・ベリーのような脚。

そして美女は、ナースの服をまどつていた。

紗枝はすっかり緊張してしまい、赤面して言つた。

「はい……あの、ここって……？」

うすうす分かつていたのだが、紗枝は確認のためにたずねた。美女は口角を綺麗にもちあげ、目を細めて紗枝にいつた。

「エステティックサロン、『ビューティー』です。

わたくし、店長の牧野です。今日はお越しいただき、ありがとうございます」

女でもうつとりするような笑顔で、牧野栄次の姉、牧野恵理子は、ナース姿で紗枝を魅了した。

第五話 それでは「」初体験

「栄次から話は聞いていたから、とんとんとんと、進めちゃいま
しょうか」

カウンター（は受付窓口だった）前のソファに座り、ガラステー
ブルに置かれた半永久的に枯れない真空保存のバラを見つめ、牧野
店長は話し始めた。

紗枝は、出された暖かいカモミールのハーブティーを一口飲んだ。
「今日は、痩身でこられたんですね？」

店長が微笑んでたずねた。

「えーと……」

紗枝はどきどきしていった。

店長の美声とは裏腹に、きのうの返事で紗枝は下ばかり向いて
いる。

「紗枝さん、もしかして緊張します？」

おもむろに、店長が尋ねた。

「ええと……はい。い、いえ！」

実は栄次から詳しい事は何も聞いてなくて

「ああそうだったんですね。意地悪な弟で申し訳ありません」

ほほほと笑つて、牧野店長は一瞬にして、部屋の雰囲気を爽やか
にした。

すごく綺麗に笑う人だなあ……

紗枝は店長の笑顔に感動しつつ、うらやましいと思つた。

「ほらほら紗枝さん。背中を曲げると、血流が滞っちゃって、新
陳代謝が鈍くなっちゃいますよ」

店長が、紗枝の背中をぽんぽんと叩いた。

「肩こりとか、大丈夫ですか？」

「あ、そうですね、最近ちょっと辛いかな」

紗枝は右肩をさすつていった。

「あらまあ、それは大変ですね。

「どうです、話は後にして、一度、こちらの体験コースやってみませんか?」

「え? マッサージとかですか?」

紗枝は驚いて尋ね返した。

「そうですね。インドマッサージとか、リンパマッサージとか、ソルトマッサージとか。

色々種類がありますけど。体験なら、まずはインドマッサージがお勧めですね」

「えと……インドマッサージとは……」

紗枝の頭の中には、サリーを着たインド人女性と、バリ島の黒人女性の姿しか思い浮かばなかつた。

「体の血流をよくするための、全身マッサージで……

「うーん、説明するより、一度やってみるのがいいですって。む、どいども」

「え、えっと」

紗枝はだんだんと、店長が話す専門用語と、魅惑的な店の雰囲気に、理性をなくしそうになつてきた。

何か怖いよう、逃げたい!

紗枝は泣きそうになつて目をぐるぐるとむつた。

そのとき、

『本気できれいになりたいんだな?』

栄次と誓いを立てた、あの部屋の光景が、紗枝の頭をよぎつた。

「…………」

目を開いて、紗枝はぐつと下唇をかんだ。

「紗枝さん?」

紗枝の顔を覗き込んで、店長が優しくたずねる。

「……はい、じゃあ、どうやってやればいいんですか?」

めいこぱにの勇気で、紗枝は店長の顔を見つめ返していった。

「じゃあまず、向こうの部屋でお着替えしていただけますか」

にっこりと微笑み、店長がバスタオルと、ブルーの紙ナップキンを

紗枝に手渡した。

紗枝はどきどきしながらそれを受けとった。ノドはからからに乾いていた。

*

「どうでした?」

ソファに座つて、新しいハーブティーを紗枝の前に置き、店長はたずねた。

「はい……あ、ありがとうございます」

紗枝は少しほんやりとして、ソファに身を沈めていた。

彼女の体は、温泉帰りのようにはほこほこに温まっている。マッサージを受けてみて、紗枝は明らかに体に変化を感じた。服が気持ちぶかぶかしている気がする。

「すこいです。足とか腰が、あんなに細くなるなんて」

マッサージ後のシャワー室で見た自分の身体のラインを、紗枝は思っていた。

「紗枝さんが、変化の出やすい体だつたというのもありますね」微笑んで、店長はカルテをめくらながら、紗枝にいくつか質問をした。

「紗枝さん、何か運動とかされました?」

「あ、はい。テニスとバトミントンを、学生のとき」

「へえ、じゃあ今も?」

「いえ、今はやって無くて……」

「ふんふん、じゃあ、ちょうど今、大学一年生だから、そろそろ代謝が落ちかけてくるときかなあ」

店長は唇をとがらせていった。

「あ、そうなんですか」

「うん、身体の代謝は、大体二十歳から落ちてきますからねえ。だからそこから、いかに急激に落とさないかが、大事になつてくるんです」

「へえ……あのね、牧野店長？」

紗枝はためらいながら、店長の話を一度、切つた。

「何ですか？」

「私、最近よく考えるんですけど、ここは外見を綺麗にするところですね？」

「ええそうですよ。外見を綺麗にする、それはまた、体の中からお客様を綺麗にしていくという事。『ビューティー』では、お客様の体質改善を目指していますの」

「えつと、それは、メイクとか強引なダイエットとかで、一時的に綺麗に見せるだけじゃなくつて、健康的に痩せるつてことですか？」「そうです。健康的に痩せなくつちや、意味ないじやないです」

牧野店長は続けていった。

「今日体験していただいたインドマッサージも、リンパの流れをスマーズにして、血液の循環をよくし、脂肪燃焼を促進させています。これを続けることにより、痩せやすい体にしていくことを目的にしていますの」

「はあーすごい」

店長のトークに紗枝は感動した。

「紗枝さんは、今日施術に入らせてもうつて、やりがいのある体でしたよ」

「ええ、どのあたりがですか？」

「足とか長いし。ちょっと太ももの筋肉が固まっちゃつていて、頑固なセルライトがあつたけど、頑張つてほぐせば、すつとした綺麗な足になりますよ。」

「……足が長いなんて言われたの、初めてです」

「ええ、ほんとですか」

「…………」紗枝は目を伏せ、黙りこんだ。

「どうしたんですか？」

「いえ……やっぱり、人って外見重視のかなあって思つて」

紗枝はうつむいたまま、つぶやいた。

「最近、好きな人に告白したんですけど……」フランれちゃつて

「あら、なんて男」

「その人、すごいかっこよくて、優しくて」

結構、仲よかつたんですけど……

でも、私とは『そんなんじゃない』って。

性格が、合わなかつたんでしょうか……

それとも私が可愛くなかったからかなあ

「紗枝さん、外見にコンプレックスとか持つてます？」

店長がきいた。

「ううん、はい。めっちゃ持つてます」

「こんなに可愛いにねえ」

牧野店長は紗枝の頭をなでた。

紗枝は恥ずかしいような嬉しいような気持ちではにかんだ。

「外見つて、何んでしうねえ」

紗枝はつぶやいた。「内面より、外見のほうがよく見られるのかなあ……」

「私の意見ですけどね」

店長が前置きをした。

「はい」

「やっぱり、見た目は大事ですよ」

紗枝の胸がズキンといたんだ。

しかし、店長はそんな紗枝に、やさしく微笑みをもつて続けた。

「『見た目は重要ぢやない。大事なのは心だ』という人は、外見への劣等感からそういうつているのではないいかと、私はつい疑つてしまふんですね。

何をこまかそそうが、大事ですよ、見た目は

「うつ」「ひつ」

紗枝はうつなんだれた。

「でも、考えてみて、紗枝さん。

誰しもみんな、好きな俳優を見てうつとりしたりするじゃないですか。

きれいな人が隣にいると、エネルギーをもらったりしません?

外見は大事なんですよ。特に『第一印象』という点においては

「え?」

紗枝は店長の顔を見つめた。

第六話 体と一緒に「うるさい」も醜い

「え？」

紗枝はきょとんとして店長の顔をみつめた。

店長は凛々しくいった。

「確かに、第一印象の良し悪しどこには、大幅に外見から判断されるなと思います。

でもね、その先、相手といい人間関係を築くかといつ話になると、外見だけじゃもたないと思うんです。

長く付き合っていくとなると、『内面』の比重が大きくなつてくるんじやないかしら」

紗枝はうなずいた。

店長は続けた。

「だからね、外見と同じく内面も大事だと私は思います。

それにね紗枝さん。両者つて、実は切り離せないものなんですね。

たとえば、昨日まで一緒にスーツを着て働いていた同僚が、ある日、ぼろぼろの、くつさじTシャツと、破れたジーンズで出勤してきたり?

みんな、『どうしちゃったの、あいつ?』って思いません?

その人を見る目が、何かしら変わるでしょ?」

「うん、確かにそうです」

紗枝はいった。

「つまり、『どうしたの? 何かあつたの?』と、内面について考えるんですよ」

「ああ、ほんとだ!」

紗枝は手をうつた。

「みんな、内面と外見が、ある部分でつながっている」とを、ちゃんと分かっているわけです。

そうすると、内面の充実度というのは、自然と外見にも現れてくるのだと私は思います。

私たちエステシャンは、お客様の外見を磨いていくのと同時に、内面を磨くお手伝いもしているんです。

そうしていきたいんです

「はい、すごい……そう聞くと、私……」

段々と紗枝の表情に、生つ粹の明るさが戻ってきた。

「店長、なんだろう、私、とにかくもつと綺麗になりたいです！」

「えらい！」

店長がパンとひざを叩いて、ソファーから立ち上がった。

「ちょっとこっちへ、紗枝さん」

店長は左の壁の扉を開き、小部屋に紗枝を押し込んだ。

「て、店長」

紗枝はどぎまきした。

狭い部屋で、二人は顔がくつつく位に近づいた。

うわあ、ほんとに綺麗な肌！

紗枝は顔を赤くした。

店長の美しい顔が、紗枝の十センチ田の前にある。

こんなに綺麗なら、男じやなくともときめくよ！

彼女に惚れそうな紗枝の手をとつて、店長は真面目な顔でいった。

「その言葉、待つてましたよ、紗枝さん。

そんな男のことは忘れて、ドカーンと綺麗になりませんか」「ドカーン」と？

紗枝は少し、引きつった笑いを浮かべた。

「えーと、つまりは？」

秘密を耳打ちするよつにひそひそと、しかし興奮して、牧野店長

はいった。

「集中コースを組んで、体质改善しちゃうんです」

「コース！」紗枝は小声で驚きの声を上げた。

店長が紗枝の手を強く握った。

「やる気のある人は、大歓迎です。

弟からも、熱心な子だつて聞いてましたし。

店長の権限をフルに使って、あなただけの特別メニューを作つち
ゃいます」

そう言い切ると、牧野店長はまじめな顔になつて、紗枝の顔をじ
つと見た。

「紗枝さん。でもね、さつきの話なんですが。
人つて絶対、もともと綺麗なんですよ」

「え？」

紗枝はきょとんとして、店長の顔を見た。

店長はにっこりと微笑んで、もう一度いった。

「人つて、もともと綺麗なんです。

私たちはね、紗枝さん。エステで何をしているかといえば、生活
習慣等でゆがんだ身体を元に戻す施術をしてるんです

「ゆがみを治す施術ですか？」

「そうですよ。だからもともと持つてて、その人本来の綺麗な体
に戻していくんです。

紗枝さんはもともと綺麗なんですよ」

「私のもともと綺麗なんですか……」

紗枝は、ドキドキしながら真摯に店長を見つめた。

店長はいった。

「私は、外見とは『外見ファクター』であつて、
『視覚的コミュニケーション』だと思つています」

「そとみファクター？」

つまり、見た目因子？

すごい言葉だなあと、紗枝は思つた。

「外見ファクターを磨いて、いつそ綺麗なあなたに近づきましょ
う、紗枝さん」

そして紗枝の手を握つていた店長は、ついには紗枝の両肩に手を
おき、きらきらとした瞳で彼女を見つめた。

「がんばりましょー！」

「……はい、店長」

紗枝は力強くうなづいた。

「決めました。

あたし一生懸命、綺麗になります！」

第七話 ますますナースはヒートアップ

「店長、よろしくお願ひします！」

「まかせて紗枝さん！」

「というわけで、スタッフの皆さん。カモーン！」

「へ？」

紗枝は意表を突かれて固まつた。

店長が背後のブルーのカーテンをシャツと開いた。
なんとそこには、店長と同じく、ナースの格好をしたスタッフの
面々が。

十人近く、ずらりと並んでいる。

二人の会話を覗き見していたのだ。

「おお、皆さん神々しい！」

紗枝はまた、クラリとめまいを起こした。

店長に負けないほど自信と後光に満ちたスタッフが、
「はじめまして、紗枝さん」と、一斉に挨拶をした。

「私の自慢のスタッフです」

そういうて、店長もその団体の中に入った。

「はうっ！」

紗枝はまぶしさにあてられてしまった。

店長を筆頭にした、あまりにも美しいエステシャンたち。これで、一枚の絵画が出来上がりそうだった。

「紗枝さん、話は聞いてました。一発、綺麗になりましょう
澆漬」とした声で、一人のスタッフが紗枝に歩み寄ってきた。

歳は三十代くらい。

落ち着いた雰囲気の、比較的がつしりとした体格の女性だ。

背が高く、水泳選手のように肩が厚い。茶色い髪はショートカット。

形のいい耳に、ダイヤのピアスが光る。

エステシャンにはめずらしく、健康的な焼けた肌。その笑顔には、
透き通る白い歯。

紗枝はこのエステシャンに、自分と通ずる体育会系のノリを感じ取つた。

店長が進み出て、彼女を紹介した。

「紗枝さん、こちら、チーフの中島先生です。

先生は東洋医学に長けていて、ここではモンテセラピーを担当していただいています」

「モンテセラピー？」

「東洋医学の知識を使つた、頸椎や体中のツボを刺激して、体の内からゆがみを治していく施術です」

店長はいった。

「ここ」のエステは、西洋・東洋混合でやつてますからね。効果の出は早いですよ」

中島チーフは微笑んでいった。

そしてしゃがみこみ、紗枝の身体を触り始めた。

「ひやつ」

「大丈夫、そのままじつとしてください」

中島先生は、もうすでに「お仕事モード」に入つていた。

「はあ～何でしじう、私、これからどんなことをするんですか？」

されるがままになりながら、紗枝は尋ねた。

「そうですね、紗枝さんは、腰周りと足の集中コースがいいかと。足は、そうですねえ、筋肉質で太ももの厚みが気になりますので

……

『スペシャル』いつときましょうか」

スペシャル？ 紗枝は内心びくついた。

「うん。 そうですね」

店長が力強くうなづく。

「外からの刺激で、固まつた筋肉と、その間に挟まつたセルライトをほぐしていく強力なマッサージです。

やわらかくほぐせば、そこの筋肉も正常な位置に戻していきますし、どんどん細く、綺麗な足になつていきますよ」

中島チーフはにっこりと微笑んだ。

店長が続けていった。「あと、ウエスト。もうちょっとくびれが欲しいですね」

「そうですね、じゃあそのあたりはソルトマッサージで脂肪燃焼がいいでしょうか」

中島チーフと牧野店長が、どんどん紗枝用カルテを作つていく。

「ああ、あの、店長」

紗枝がその勢いを一時シャットダウンして、店長に尋ねた。

「はい?」

店長はカルテから顔を上げて、聞き返した。

紗枝は遠慮がちに尋ねた。

「それでですね、その、気になるところの……お値段は?」

「ああ、そうでした」

そのことに今思い出したようで、店長は、ぽんと手をたたいた。すると、後ろのスタッフの一人が、さつと電卓を持ってきた。

「まず、コースとしましては」

軽快なリズムで、店長が電卓を叩く。

「大体、三ヶ月コースが通常でして。

紗枝さんは、短期集中型で、三ヶ月コースを組みたいと思つてゐんのです」

「ふんふん」

「ちょうど体の細胞がすべて入れ替わるのが、三ヶ月ですからね。安定期も入れていくとなると、もうちょっと伸ばしたいけど……ま、とりあえず三ヶ月でいきましょう」

「はい、なるほど」

「で、お値段ですが」

「はい」

紗枝は『ごくりとつばをのんだ。

「一十万ですね」

「

まず、絶句。それから口を半開きにして、紗枝は焦点の定まらない瞳で天を仰いだ。

なにしろ紗枝は大学生。普通の貧乏大学生なのだ。

しかし、紗枝は天井をしばらく見上げていた後、勢いよく頭を戻し、凛々しい瞳で店長を見つめた。

「分かりました、正面してきます」

「かっこいい！」

店長が手をたたいた。

「紗枝さん、素敵！」スタッフ全員から、拍手喝采があがつた。

店長は紗枝をぎゅっと抱きしめた。

「紗枝さん、間違いなく綺麗になりますー。」

店長に抱きしめられたまま、紗枝はじっと黙っていた。

下唇を軽く噛み、自分を落ち着かせるように、何度もうなずいた。どきどきが治まらない。

紗枝は服の上から胸を押された。

彼女は一步を踏み出した。

そう、紗枝は今、新しい世界に挑戦し始めたのだ。

*

胸ポケットに入れてあつた携帯のバイブが震えたとき、栄次はちゅうビードライブウェイで休憩していた。

「あ」

携帯のメールを見て、栄次は小さくつぶやいた。

時刻はもう夕方で、山道に作られたドライブウェイから見える夕

日は、はるか向こうの海の中に沈んでいく最中だつた。
バイクをなでながら、栄次はメールを丁寧に読んだ。
メールは、紗枝からだつた。

『栄次、ありがとー！ 今日店長に色々話聞いて、さっそく、ダイ
エットはじめることになりました！

紹介してくれて、ほんとありがとー 』

「おお」

栄次はメールを読み終わり、少し複雑な心境を抱いた。
多分、結構なコース、組んだんだろうなあ。

「まあ、体壊すよりはずつといいしな。姉貴もいるし、安心だ」
独り言をいいながら、栄次は紗枝に返信メールをうつた。

『無理しすぎんなよ～』

送信を確認して、栄次は携帯を閉じた。

胸ポケットにしまいなおすと、ゴーグルをはめ、エンジンをふか
した。

そして、彼女との夜のデートの待ち合わせ場所に向かって、大き
くバイクのハンドルをきつた。

第八話 まるでVIPなお姫様

三日後、いよいよ紗枝のエステコースが始まった。

「こんにちは」

紗枝は、エステサロン『ビューティー』の扉を軽快に開いた。カラソカラソと、扉の鈴の音が紗枝を出迎えた。

「あつ紗枝さん、こんにちは！ 今日からですよね」

中島先生が受付カウンターから、オリエンタルな笑みで、紗枝を出迎えてくれた。

「はい、よろしくお願ひします」

紗枝は笑顔で答えた。

今日から始まるんだ、初めてのエステ！

紗枝はどきどきしながら、会員カードを中島先生に渡した。

「はい、じゃあこちらにお着替えください」

体験コースの時と同じように、バスタオルと紙ナップキンが渡され、紗枝は更衣室に案内された。

「 やつぱりゴージャス」

更衣室に入つて紗枝は荷物をロッカーに詰め込むと、あたりを見回した。

この前は緊張してすみずみまで見れなかつた更衣室を、今日紗枝は改めてじっくり観察した。

そして改めて紗枝は、玄関から受付、そして更衣室、このエステサロンの隅々にちりばめられた美意識の高さに感銘を覚えた。

更衣室の手洗い場で、紗枝はリポーターの気分で、独り言のコメントをつぶやいた（周りから見ればかなりイタイ子だ）。

「わー、すごいですねー。この蛇口……やつぱり、金でしょうか？」

この照明ライトの笠、巻貝模様でかわいいです！ それに上品。

椅子なんて革ぱりですよ……。

「この化粧水と美容液。一本一万円以上もするのに、自由に使っていいなんて。

ううん、ここに来るだけで、刺激がいっぱい……誘惑も、いっぱい

い

ちらりと紗枝は化粧水と美容液を見つめた。

「いや、ダメだ！」

紗枝は、化粧水と美容液を、自前の小瓶に詰めて帰りたい欲望を抑えた。

美意識の高さとは、誇りの高さでもある。

普段なら何とも思わないセコイ根性も、ここでは萎えていくのだ。

「そうよ、これよ。この気高さよ

紗枝は握りこぶしをつくつていった。

確かに、これほど洗練された美意識の高い空間に入ると、紗枝の美意識も自然と高まつてくるようだつた。

そのとき、更衣室のガラス扉がノックされた。

「紗枝様、紗枝様、ご準備できましたらどうぞ

紗枝様！

更衣室の向こうから響く、優しいスタッフの呼び声が、紗枝をますます、お姫様気分に仕立て上げてくれる。

紗枝は急いで服をすべて脱ぎ、紙ナップキンをはいてバスタオルで身体を包んだ。

「すみません、お待たせしました

紗枝が扉を開くと、そこにはカルテをもつた小柄で可愛らしい先生が立っていた。

紗枝はどきりとした。

きやー、可愛くて綺麗！

身長は一五〇センチくらいだろうか。

濃いブラウンの髪は背中まで伸びて、後ろで一つにくくつてある。

毛先は可愛くカールしており、ケアがしつかりしているので、天

使の輪ができた、瑞々しい髪をしていた。

小さな顔に、大きな二重。

淡いリップの塗られた唇の口角が、可愛く持ち上がる。

「はじめまして紗枝さん。私、横美祢よこみねといいます」

「あ、はじめまして。今井といいます」

紗枝はぺこりと頭をさげた。

すると、横美祢先生が紗枝の手を、がしづと握った。

「ひつ？」

紗枝は思わず声を上げた。ずすいと、横美祢先生が紗枝に迫った。
「聞きましたよ、紗枝さん。今回特別コースを組んだんですって？
私、とっても感動しました。

店長と同じ気持ちで、紗枝さんの美改革の応援させていただきますね！」

田をきらきらと輝かせ、横美祢先生は意気込んでいった。

「は、はい。がんばります！」

ひえ。

紗枝は横美祢先生の気迫に押されて、背中をそらせた。

「あら、ごめんなさい。つい力が入っちゃって」

横美祢先生は手を離して、また可愛らしいナースの雰囲気に戻つた。

「ではこちらへどうぞ」

そして紗枝を廊下の奥に招いた。

「は、はい」

紗枝はバスタオル一枚で、横美祢先生の後について歩いた。

第九話 ポーリング・バスルーム

二人は、両側に扉が連なる細い廊下を歩いた。廊下の壁は、うす水色でさわやかな印象を紗枝に与えた。そして紗枝は、廊下の突き当たりに通された。そこには体重計があった。

横美祢先生が尋ねた。

「お手洗いは行かれますか？」

「あ、はい。行きまーす」

紗枝はぴくんと耳を動かして、返事した。

実は、紗枝はこのエステのトイレに入るのが初めてだった。トイレの扉は、更衣室の向かいの壁にあった。

「じゃあ、ちょっとすこません」

「どうぞどうぞ、」ゆっくり

横美祢先生はにっこり笑つて体重計の前で待つた。

んつ？

トイレの扉の前で、まず紗枝は、ドアノブが普通ではないのに気がついた。

トイレのドアノブなのに、まるで密間につながるような豪奢なノブなのだ。

なんか、トイレに行く感じじゃないなあ。

紗枝はドキドキしながらトイレに入つた。

トイレは、小さな部屋くらいの広さだった。

トイレの中にも洗面台があり、そこもやはり更衣室並にゴージャスだった。

更衣室の洗面台と同じく、ここのも金の蛇口で、脇にはアロマ石

鹹があいてあつた。

「ひやー、どこもかしこも、やっぱり豪華」

紗枝はささやいて、それから便器を観察してみた。

曇りひとつない洋式便所。

フローラルな香りが広がっている。

紗枝は、ロールペーパーの取り付け口を見てみた。ペーパーが差してある芯棒は、プラスチックではなく、なんと銀だ。ペーパーの上にとりつけられた笠は、花と小鳥の浮き彫り模様がほどこされ、こちらもやはり銀製。

「すゞ……」

紗枝は感動しながら、ようやく当初の目的のために、便器の蓋を開けた。

すると、何と金箔が漂っている！

「うわ！ 輝いてる！」

紗枝は思わず便器に顔を近づけ、それを凝視した。

「ありえない、ありえないわ」

そういしながら、紗枝はちやっかり便座に座った。こんなトイレで用を足す者は、どこかの国のVIPしかありえないと思っていたのに、そのトイレを今自分が使っている。紗枝はもう、自分が何者なのか、分からなくなってきたしだった。

「ああすゞがつた

トイレから出でてくると、横美祢先生が十分間も待ちぼうけをくらつて、体重計の前で待っていた。

紗枝は顔を青くして、ダッシュで体重計の前へ走った。

「す、すみません」

「ああ、紗枝さん。大丈夫ですよ、用は済みました？」

紗枝は顔を真っ赤にした。

別の意味に解釈されたおかげで許されたのが、逆に恥ずかしかった。

「では、体重をはかつてみましょうね」

横美祢先生がいって、紗枝を体重計の前にすすめた。

「は、はい」

紗枝は気を取り直して、背筋を伸ばした。

体重は、紗枝が一番氣にするところである。

ここエステでは、施術前と施術後の二回、体重をはかる。

同時に体脂肪もはかるので、汗で体重が落ちたのか、それとも脂肪が落ちたのか、そこで判断するのである。

「はーい、ではどうぞ」

横美祢先生がボタンを押した。

紗枝は体重計の前に立った。

そこではつとした。

体重計の前にも全身鏡がある。

自分の、ぽつちやりした脚を見つめ、紗枝は一抹の焦りと共に、決心をあらたにした。

ここから変わるんだぞ。

ファイト、あたし。

そして紗枝は、右足を体重計に乗せた。

「あ

タオル分の四百グラムはちゃんと引いてくれてある。その細かな気遣いに、紗枝は感心した。

ちちち、と体重計が音を鳴らした。

紗枝の体重と体脂肪が、数値として現れた。

「う

紗枝は声を詰まらせた。

この前、自分で家ではかつたよりも太っている。紗枝は顔を青くした。

横美祢先生が、カルテにそれを記する。

「うーん、ちょっと体重の割りに、体脂肪が多いかな」
先生はいった。

「ああ、そつなんですか」

紗枝はひやりとした。

「大丈夫ですよ、ここから来る皆さんは、そこからきちんと瘦せていくんですから」

カルテを閉じ、横美祢先生は微笑んだ。

紗枝はそれを聞いて、ほっと息をはいた。

「はい、じゃあ、こちらのお部屋にどうぞ」

横美祢先生が、突き当たりの右手の扉に手招いた。

「はい」

紗枝はツバを飲んで返事をした。

さあ、始まる。あたしのエステコース。

お金は絶対無駄にはしない。

ここであたしは綺麗になるんだ。

ゆっくりと扉が開かれる。紗枝は背筋を伸ばして、その先へと進んでいった。

第十話 セルライトの、ほぐし方

紗枝はどきどきしながら、施術室に通された。

この前の体験インドマッサージでは、緊張のあまり半分パニッシュになっていたので、なかなか部屋の隅々まで見ることができなかつた。

今日は落ち着いて施術室を見ることができる。紗枝はこの部屋にあるものすべてを、興味をもつて見回した。

その前に、エステサロン『ビューティー』の構成を説明しよう。このエステサロンは、十一個の施術室があり、一部屋が大体三畳ほどの中室である。

各部屋で、マッサージや美顔、カウンセリングが行われている。そのため、目的に応じて、部屋に備え付けてある設備が違う。紗枝が通された部屋は、真ん中に大きなモスグリーンのベッドが備え付けられていた。

ベッドは表面がナイロンで包まれていて、汗をかいても、それ以上しみこまないようにしてある。

壁には、効果的にやせるダイエットのノウハウが書かれたポスターが貼つてあつた。

その隣には、人間の経絡を全身図で説明したポスターがあつた。扉から向かって左脇に、小さな戸棚があつた。アロマオイルと、ストップウォッチがあつてある。

横美祢先生が、扉を閉めていった。

「はい、ではタオルいただきますね」

「はい」

紗枝は、するつとタオルを身体からほどき、紙ナップキン一枚で立ち尽くした。

そのまま、ベッドに仰向けになるよう、すすめられた。

ゆづくじと、折った膝をベッドの上で伸ばしながら、紗枝は赤面

した。

「やつて、誰かの前に裸同然で寝ころぶなんて恥ずかしいな。

紗枝はまだ、エステに対しても悪いをぬぐいきれていないようだつた。

何せ紗枝は、体育会系だ。ダイエットと考へると、まずはトレーニングする事を思いつく。

自分の身体は、自分で動かす。そしてエネルギーを消耗する。ダイエットといえば、常に動くこと、能動的であり、そこに食事制限が入るのだと彼女は決めてかかっていた。

しかし、「誰かに触られる。自分が受身になる」という、このHステというダイエット方法。

それはまるで、紗枝には甘えのように感じるのだった。
「ええと、今日は何をするんでしょうか？」

紗枝は尋ねた。

「そうですね、今日は、『スペシャル』で、太ももをほぐしましょうか」

横美祢先生がいった。

出た、スペシャル。

「スペシャルは一人でやりますからね」

「え？」

そのとき中島先生が施術室に入ってきた。

「あ、中島先生」

紗枝は顔を上げて先生を見た。

「お待たせしました紗枝さん。今日は私が一緒に入らせてもらいますね」

白い歯をきらりとさせ、中島先生は笑つた。

「ここにちは、紗枝さん。隣で私も、聞いてますから」

中島先生のうしろから、店長がひょっこりと顔を出した。

「あ、店長！」

「がんばってね、紗枝さん」

店長は微笑んで、扉の前から姿を消した。

「ではでは。紗枝さん、うつ伏せになつてもらえますか」
中島先生はいい、戸棚からボトルを出して、オイルを手に塗り始めた。

横美祢先生もオイルをとり、紗枝の両足に塗り始めた。
わあ。なんだかいい香り。

そうか、今から一人で両足マッサージかな？

紗枝はベッドにおでこを押しつけて、手は横に伸ばした。
そしてどきどきしながら、マッサージされるのを待つた。
が、次の瞬間、激しい音が部屋に響いた。

「べちべちべちべちべちべちべち！」

「な、なにこれー！？ いつ、痛いよー！？」

エステでは聞こえるはずも無いような音が、紗枝の両太ももから
響いた。

二人のエステシャンが、紗枝の太ももを、両手で思いつきり叩き
始めたのだ。

それはまるで、民族楽器の太鼓を叩く、原住民の宴のようだつた。
うそー！

紗枝は思わず歯を食いしばった。

こぶしを強く握る。

一人は激しく、紗枝の脚をはたく。

そして今度は、手をチョップの形にし、ずがずがずがずがと、ま
たも彼女の太ももを叩き出した。

あいだー！

紗枝は涙ぐみになつたが、ベッドにかじりついて我慢した。

「こうやつて……、ね。固まつた筋肉をほぐしていくんですよ」

息を切らせながら、中島先生は、なおも紗枝の太ももをひっぱた
く。

そしてようやく叩くのが終わると、今度は紗枝の太ももを、繩帶でぐるぐる包み始めた。

「ええ、これは何ですか？」

紗枝はぎょっとしていった。

「この特別なテープで、ほぐした脚を、綺麗な形に整えるんです。そしてこれから三十分、サウナタイムになりますね」

横美祢はそういう、ベッドの脇のボタンを押した。

そして、ベッドの下から大きくて厚いサウナシートを取り出して、紗枝の体全体を包み始めた。

きやああー、これじゃあミイラじゃない！

紗枝は、シートに体を固定される自分の姿を、とても恥ずかしく思つた。

そのうちに、ベッドがじわじわと熱を帯びてきた。

「それじゃあ、紗枝さん。また見に来ますからね」

二人のエステティシャンは、手をふつて部屋から出て行つた。

紗枝は一人部屋に取り残され、急にぽつんとなつた。

沈黙すること、十五分。

「うう……めっちゃ暑い～。三十分なんてもたないよ！」

紗枝はつめき声を上げ始めた。しかし、時間まで紗枝は耐えた。

横美祢先生が様子を見に来た時、彼女はぐつたりとなつていた。それでも紗枝はがんばった。彼女の根性は強かつた。

そして、ミイラの恰好から脱した彼女は、なんと施術後、一・二キロもやせていた。

体脂肪も〇・四パーセント減つている。

「すごいです紗枝さん！」

横美祢先生は大喜びで、カルテに体重を記した。

「は、はあ。やりました」

体重計を降りて、紗枝はふらふらなまま笑顔を作つた。
しかし……

「…って、ほんとにエステなの？」

そして紗枝は、突然にやーっと笑った。
なぜだか笑いたくなつたのだ。

横美祢先生が、びくりとして紗枝に尋ねた。
「どうしました。気分でも？」

「いえ、大丈夫です」

すると今度は、紗枝は落胆するように笑つて、ついには、背を反らせて、高らかと笑つた。

それにつられて、横美祢先生も笑い出した。なぜだかおかしくなつて笑つた。

涙目になりながら、紗枝は思った。

今後、エステティックサロンのイメージは、セルライトと共に砕かれていくのだろうと、思った。

第十一話 ヤドカリの沈鬱

雪はふらねど、底知れぬこの寒さ。

大学生には、身も凍るこの時期。

一月の終わり、紗枝の大学では秋期試験が始まった。

その頃になると、試験の日程とレポート提出の課題が掲示板に張り出される。

まじめに授業に出ている生徒は余裕の表情で掲示をみつめ、出席日数の足りない生徒は試験とレポート提出で挽回ほんかいしなければと、あせりを見せる。

大学の食堂では、栄次と紗枝がレポートの下書きにとりくんでいた。

「へえ、それはそれは」

シャープペンをノックしながら、栄次はくすくす笑つていつた。

紗枝は顔を赤くして、小声でいった。

「あれが最近のエステなの？」

紗枝は栄次に、『スペシャル』について（話せる範囲で）事細かに説明した。

栄次は笑いこけて、腹をおさえた。

「めちゃくちゃだなー」

「めちゃくちゃよー でも痩せたわ」

紗枝は、そこだけは『スペシャル』に感心した。

「でも、あんなん毎回じや辛すぎる」

紗枝はさめざめと嘆いた。

「それだけじゃないよ。リラクゼーション・マッサージつてのもあるし」

栄次は田じりの涙をぬぐつていった。

「詳しいわね」

「なにせ店長が、姉貴ですから」

「そう！ 牧野店長、サイドー・ビューディフォーヨね！」
「なんやねんそりや。もつちょっと英語を勉強しなさい」

栄次はいつて、英語のノートを紗枝に渡した。

栄次は、英語ノートを書き始めた紗枝をほほえましく眺めて、いつた。

「でも、楽しくやつてるみたいじゃん」

「まあ、確かに面白いわ」

そこは素直に認めて、紗枝は心の中で栄次に感謝した。
「でさあ、栄次。この授業のレポートなんだけど……」
紗枝はいいながら、鞄から新しいノートを出した。
ついでに、自前のペットボトルも出してテーブルに置いた。
それに気付いて、栄次がいつた。

「あれ？」

「え？」

紗枝はきょとんとして、ペットボトルのウーロン茶から口をはなした。

「炭酸系、やめたんだ？」

「ああ、うん」

紗枝はペットボトルを持ち上げて、いつた。

「ジュース一本でも、砂糖つて結構たくさん入つてるし。

それに炭酸は骨を溶かしかやつから、ほどほどにすんな」とした

の

「へえ」

栄次は頬肘をついて、紗枝をまじまじと見つめた。

紗枝はいつて、自分でうなずいた。

「生活習慣もえていかなきやつて思つて。

エステに行つてない時間は、あたしが体をケアしてあげなくちや、でしょ」

「うん」

栄次は感心して、うなずいた。

「一週間にどれくらい通つてんの？」

「週二」。今のところ、それでコースが……」

いいかけて紗枝が、ぱつとテーブルの下に伏せた。

「何？」

ぎょっとして栄次がいった。

「大崎君よ」

テーブルの下から、小声で紗枝が返事をした。

紗枝はそれ以上何もいわず、巻貝の蓋を閉めたヤドカリのように、沈黙してしまった。

栄次は食堂の入り口を見た。

今、数人の学生が、食堂に入ってきたところだった。

「あ、ほんとだ」

栄次はつぶやいた。彼の足の下に隠れたヤドカリが、一瞬体を震わした。

紗枝をフフた、大崎君（紗枝に敬意を込めて、「大崎」ではなく、「大崎君」と呼んでおこう）が、こちらに向かつて歩いてきた。なぜなら栄次（と紗枝）が座っていた席は、注文を聞く学食のねばさんがいる、カウンターの目の前にあつたからだ。

幸い、このテーブルは、丈が長めのテーブルクロスがかけてあり、栄次の足元にいる紗枝の姿は、誰にも見えなかつた。

紗枝は、栄次のジーンズの破れを見つめながら、じつと大崎君の声を聞いていた。

「なんにする？」

大崎君の声が聞こえた。

「俺、カツカレーにしようかな」

多分、彼の友達だろう。野太い男の声が聞こえた。彼はいった。

「そつちは？」

「えー。あたしは、オムライスにする」

可愛い女の子の声が聞こえた。

「あたしは、パスタにしようかな」

もう一人、大人っぽい女性の声が聞こえた。

二人の声で、紗枝の胸が、どくんと脈打った。

「ねー、大崎君は？」

可愛い声が、彼に尋ねた。

「そうだなあ。あやちゃん、オムライスなんだよね。俺も同じのにしようかな」

脈打つていた胸は、急激に萎縮し、ヤドカリは内側へと締めつけられた。

紗枝は下唇を噛んで、ぎゅっと拳を握った。

顔を赤くして、目線を床の方に落とした。

テーブルクロスと床の隙間から、白い光がこぼれて見えた。

そのすぐ向こうには、紗枝が告白した彼の靴があるはずだった。

大崎君は、学食のおばさんにオムライスを注文した。

栄次は、目の前の大崎君たち団体を、レポートを書くふりをしながら見つめていた。

別に、取り立てて変な会話ではなかつたはずだ。

大崎君たちは、決して変な会話をしていたわけではなかつた。

単純に、メニュー見て、何を食べるか考え、それを注文しただけだ。

だけど、栄次にはわかっていた。

この些細な会話が、どれだけ紗枝の気に障ったかという事を。ヤドカリは、繊細な生き物なのだという事を。

第十一話　??　トモダチ　カレシ　カノジョ　??

お盆に、オムライスと水の入ったグラスを載せて、大崎君は食堂の扉を押した。

彼らは二階のカフェテラスに行くようだつた。

栄次は頬杖をついて、彼らの声に耳をすました。声は次第と遠くなつていつた。

栄次はテーブルクロスをつまんで、いつた。

「もう行つたぜ」

「ほんとでしようね」

薄暗いテーブルの下で、紗枝は両膝の間に顔をうずめて、三角座りをしていた。

「イタい子に見えるから、お止めなさい」

栄次は同情をこめていつた。

紗枝は、もそもそとテーブルの下から這い出てきた。

顔を赤くしたまま、栄次の向かいの椅子に、紗枝は腰かけた。

「何で隠れるの？」

栄次は、困った顔で尋ねた。

「何か……まだ今は、会うのが悔しいから」

紗枝は、目を伏して、いつた。

「何、まだ好きなの？」

頬杖をついて、栄次はいつた。

「好きというか……分かんない。好きなのかな、あたし？」

「俺に聞くなよ」

栄次はまた困ったようにして、首を傾いだ。

紗枝はもうと、頬に空気を含んだ。

「んー、とにかく！」

紗枝は両手を広げていつた。

「とにかく、何かこう。もつと綺麗になつてから、ばばーんとお曰
見えしたいの」

「ばばーんと、ね」

「そう」

顔をますます赤くして、紗枝は栄次に訴えるように何度もうなず
いた。

「そつか」

栄次は力の抜けたそつけない返事をした。

「そうなの、悪いの？」

「いや、悪くないけどね」

頬杖をついて顔を少し右に傾けていた栄次は、そのままの姿勢で
紗枝の瞳をじっと見つめた。

「そのままでいいのに」

紗枝のノドが、こくりと鳴つた。

それは、まだ小さすぎて、栄次には聞こえない音だつた。

「何よ。エステ、紹介したくせに」

腕を伸ばして、紗枝はゴツリと栄次の頭をパンチした。

「あいで」

栄次は、負けじと自分も、紗枝を小突いた。

「あいたー。女の子を殴る？」

「殴つたんだから、当然」

テーブルに、ようやく笑いが戻つた。

緊張がほどけた様に、一人はけらけら笑い、お互いをバシバシと
叩きあつた。

食堂にいた何人かの学生が、一人を見ながら、くすくす笑つて、
いつた。

「ね、見てみて、あの二人」

「可愛いねー」

「ね……付き合つてゐるのかな？ あの二人」

もちろん紗枝と栄次には、彼らのひそひそ話は聞こえていなかつた。

その時、《ががが》という音が、二人の間に割つて入つた。

「あ

栄次は、手元の携帯を見た。

テーブルに置いてあつた栄次の携帯が、バイブで振るえている。

「あ、彼女でしょ？」

紗枝はびたりと手を止め、栄次に聞いた。

「おう、多分ね」

栄次は携帯をとり、メールを開いた。

すると、急に真顔になつて、栄次は黙りこくつてしまつた。

「……」

画面に食い入る栄次を見ながら、紗枝はノートを片付け始めた。

紗枝が席を立つたとき、栄次は、はつと顔を上げた。

紗枝は微笑んだ。

「あたし次、授業あるから。栄次は？」

「あ、俺、次は休みだわ」

栄次はいつた。

「そつか。じゃあまたね」

紗枝は手をふつて、テーブルから離れた。

紗枝なりに気を遣つてくれたのが、栄次には嬉しくもあり、申し訳なくもあつた。

「おう、また」

栄次は、はなれていく紗枝に手をふつた。少し困ったような、寂しいような表情をして。

*

紗枝はそそくさと食堂を出て、教室へ向かつた。

授業はもう始まっていた。紗枝は後ろのドアから、そっと教室に入った。

同じクラスの、エミの背中が見えた。

紗枝は静かにエミの隣にきて、椅子に腰かけた。

「あ。紗枝ちゃん」

エミが小声でいった。

「『めーんエミ』。途中までのノートを見せてもらひつていい?」

紗枝は手を合わせて頼んだ。

エミは紗枝の方にノートをずらして見させてくれた。

紗枝がノートを写している間、エミがそつとやれやいた。

「ね。紗枝ちゃん。最近、牧野君と仲いいね?」

「え?」

小声で紗枝は、驚きの声を出した。

「大崎君のこと、吹っ切れたみたい……?」

「あー。うん、まあそれは」

困ったように、紗枝はいった。

紗枝は、あまり自分の恋愛について女友達には話さない主義だった。

でも、噂は自然に広がっていくものだ。

エミは紗枝から聞かなくても、大崎君との事について、誰かから聞いてしっているのだった。

「でも、栄次とはそんなんじゃないよ。だつて彼女いるし」

「えー、そうなの?」

エミが驚いた顔をしていった。

「あ。やばい。シークレットをもらしたかも。」

紗枝は慌てて、エミにいった。

「これ、秘密にしといてね」

「うんうん。もちろん」

エミは微笑んで、強くうなづいた。

約束は絶対に破られるだろうと、紗枝は思った。

紗枝からノートを返してもうひとつ、HIMIは再び授業に集中した。紗枝はノートを読み返しながら、教授の講義を聞き流し、全く別の事を考えていた。

「そうだよねえ。あんまり栄次と仲良くしてると、彼女さんに悪いかな。」

紗枝は、まだ会ったことのない、栄次の彼女について考えた。栄次の彼女が他大学の人だと聞いていた。なので、紗枝も大学での栄次との付き合いに、遠慮が無かつたのは、確かだった。

友情と恋愛って全然違うのに。はたから見たら同じに見えるのかな……

紗枝は、となりのHIMIをちらりと見た。

HIMIには、あたしと栄次が付き合っているように見えたのか。でも、友情と恋愛って全然違うよね……

紗枝はそう思いながら、大崎君と栄次を、交互に想像してみた。すると、やはり大崎君のイメージが、紗枝の胸を切なくさせるのだった。

あの、ドキドキしていた頃。好きだけじ告白もせず、大崎君の姿を追つていたあの頃の気持ちに戻るのだった。

*

「あと十分で、食堂を閉めるよ」

食堂のおばさんが、テーブルを拭いてまわりながら、学生たちに声をかけた。

食堂に残っていた栄次は、開いた参考書とノートの前で、呆然と携帯の画面を眺めていた。

「何なんでしょうねえ」

栄次はその場で一人、ポツリとつぶやいた。

「あと五分で閉めますからね」

おばさんが栄次のテーブルにも来ていった。

「はーい」

栄次は物憂げに笑つて、携帯を閉じて、ノートをしまった。

第十二話 もやもやした四センターの奇跡

「なるほど～。じゃあ瘦せたら、その彼に会つんですね」

牧野店長がいった。

施術室のベッドにうつ伏せでいる紗枝の腰を、細い十の指でツイストする。

「はい、何か用にもの見せてやりたいというか……」

うつ伏せのまま、紗枝は壁を見つめて、いった。

「そうですね。見せるんだつたら、一度いつさい連絡を絶つて、ある日突然、大変身した姿で登場するのがいいですねえ」

店長は声を弾ませた。

「ええ、ベタじゃないですか」

紗枝は苦笑いして答えた。

「サプライズは大事ですよ！」

『デンジャラス・ビューティー』 つて映画知つてます？

サンドラ・ブロック主演の

「いえ」

「一度見てください」

店長は微笑んで、次に、紗枝の腰から背中へとマッサージを移動した。

「紗枝さん、学校ではその彼と鉢合わせしたりしないんですか？」

店長が尋ねた。

「注意すれば、会わないですね」

紗枝は少し考えて、答えた。「もうすぐ秋期テストが始まるんですけど、テストのない授業なら、窓口へのレポート提出だけでいいし。

それが終わつたら春休みなので、まるまる一ヶ月会わないでします」

「いい時期じゃないですか。春休みに再会する頃には大変身ですよ

「えへ、そうですか」

紗枝は嬉しそうに、はにかんだ。

今日のマッサージは、『スペシャル』よりも軽い、ソルトマッサージだった。

ソルトマッサージのクリームは、天然塩入りで、触感は少しざらついている。

紗枝はそれでマッサージされるところがゆかつた。

「じゃあ紗枝さん。その彼のこと、まだ好きで諦めつかないんですね？」

店長が、紗枝の二の腕をマッサージしながら、彼女の顔を覗き込んでいった。

「いえ……好きというか、どうなんでしょう。好きなのかなあ、私？」

何だ、同じこといつてるような。

紗枝はあれあれと思った。

「あ……でも。

何かですね、すこしく悔しかつたつていうのはあります。

……「られ文句がちょっとひどくて」

「なこなこ、何て言われたんですか？」

店長のマッサージする手の力が強まつた。

「いやいや……」

紗枝は口を閉じて、別の話題に会話を持つていった。

つこ話の口火をきつてしまつたが、それについては、まだ誰にも言える気分ではなかつたのだ。

隣の施術室では、この間紗枝がうけた、スペシャルマッサージの太鼓の音が響いていた。

そして、激痛で叫ぶ、お客の声が。

それを聞きながら、紗枝は最後の鎖骨マッサージをしてもらつていた。

顔を覆われたタオルの下で、紗枝は眉をしかめ、フラン文句を頭の中へ反芻していた。

あれは……ないんじゃないかなあ。

首筋に汗が流れた。

仕上げの全身サウナの間、紗枝は大崎君の姿を、苦々しく思い出していた。

*

「あ、紗枝さん。お疲れ様です」

更衣室から出たとき、横美祢先生がカウンターから声をかけた。

「あ、先生。ありがとうございました」

「今日はもう終わりですか？」

「はい。今日はソルトマッサージでした」

紗枝は先生から会員カードをうけとった。

そのとき、先生がじっと紗枝を見つめた。

「紗枝さん、ちょっと太もも、細くなつてません？」

先生が、まじまじと紗枝の脚を見つめた。

「ええ、本当ですか？」

紗枝は興奮して聞き返した。

「多分そうですよ。ちょっとはかつてみましようか」

先生は、カウンターから出て来て、紗枝の脇で腰をかがめた。

ポケットからメジャーを取り出した。

すごい、常に持参だ。

先生は服の上から紗枝の太ももをはかつた。

「ジーンズの分を差し引いて……

紗枝さん、すごい、初めのときより四センチ減りますよー！」

「ええ！」

紗枝はびっくりして、目を見開いた。

「すごいです紗枝さん」

先生は自分の事のように喜んだ。

「そういえば、ズボンがゆるいな～とは、思つてましたがあ……」

「気のせいじゃなかつたんだ。

紗枝はじーんとして、自分の太ももを見つめた。

「それだと紗枝さん、服もイメージチェンジしたらどうですか」

横美祢先生が嬉々としていった。

「ゆるい服を着てるより、もつとタイトな服で、大人っぽくみせるのもいいですよ」

「ええ。そうですかあ」

紗枝は顔を赤くした。

「うん。紗枝さん脚が綺麗なんだから、スカートとか、もつとはい

たらいいですよ」

「そんな、恥ずかしいですよ」

「大丈夫ですよ。

なんなら、私と一緒に買い物に行きません?」

「えつ?」

「あら。何の?」相談?」

カウンターの奥から、店長が出てきた。

「あ、店長。

今、紗枝さんのサイズを測つたんですけど、太ももが四センチも減つてたんですよ!」

「えー、紗枝さんすうじいじゃないですか」

店長は口を縦に開いて、オペラ歌手のような顔で驚いてみせた。

「それで、新しい服でも、一緒に買いに行きませんか?」

横美祢先生は、楽しそうにいった。

「あらざるい。私も行くわ」

「ええ、店長」

紗枝はぎょっとしていった。

「紗枝さん、これも美革命計画の一端です。」

「明後日の日曜日、買い物に行きましょ~う」

先生は紗枝の肩に手を置いて、力強く握った。

有無を言わさぬ勢いだった。紗枝を抜きに、あつといつ間に「週

末買い物計画」が立てられた。

紗枝は店長と横美祢先生の携帯番号を教えてもらい、一人にも自分が番号を教えた。

待ち合わせ場所と時間だけ決めると、店長は、次のお客様が入っているからと、急ぎ足で施術室に入ってしまった。

「じゃあまた紗枝さん。

スカートはいてきてくださいねー」

横美祢先生も、次のお客様との時間が迫っていて、あまり話す時間もなく紗枝を見送った。

紗枝は呆然としたままエレベーターで下界に降りされ、ビルの前で、ようやく冷静になった。

プライベートまで、お客様と過ごしていいの?

信じられない、どうしよう。

そういうものの、紗枝はすでにわくわくしていた。

紗枝は、一人のエステシャンの、休日スタイルを想像してみた。

急に日曜日が待ち遠しくなった。

第十四話 真冬に、網タイツ

日曜日。河原町通りの繁華街にある百貨店の入口で、紗枝は牧野店長と横美祢先生がくるのを待っていた。

待ちながら、紗枝は何度も、ショーウィンドウの鏡に映る自分の服装をチェックした。

とりあえず、もつてる服の中で、一番可愛い服を着てきたけど……紗枝は不安とドキドキを入り混じさせて自分を見つめた。

赤のピー「ートに、黒のハイネックセーター。

大振りのネックレスと、小さなピアスをつけてみた。

ただ、横美祢先生に勧められたスカートは、はいてこなつた。「やつぱりなあ。無理があるよ」

脚を眺めながら、紗枝は独り言をつぶやいた。

タイトなストレートジーンズに、ショートブーツを履いた恰好。今日の紗枝は（正しいかどうかはしらないが、）パリ風ファッショングで、がんばってみた。

そして待つこと十分。背後で高らかとした声が聞こえた。

「ああ、いたいた。紗枝さん」

「あ、てんちょ……」

振り向きざまで、紗枝はくらりとめまいを起こした。

極上の美人が二人、冬場にも関わらず、大腿むき出しで闊歩してきたのだ。

店長は、ミンクの毛皮のコートを優美に着こなし、たいていの人が陥る、成金趣味のいやしさは微塵もなかつた。

恐らくミニスカートをはいているのだろうが、コートの方が長く、

それは完全に隠れていた。

それで、コートから覗く脚は、黒の網タイツで、何ともエロティズムに満ちている。

彼女はヒール十五センチのパンプスを履き、モデルのように紗枝の方へ歩いてきた。

かわって横美祢先生は、店長とはティーストの違つた、クール&キュートなファッショングだった。
普段束ねている髪をおろし、カールさせて、大きなバタフライの髪留めをつけていた。

タイトなピー・コックブルーのコートをまとい、前ボタンは止めていないので、サテンのミニワンピースがそこから覗いた。
ワンピースの模様が可愛い。

黄色のドットがつながる、波打つような縦ラインのプリントが、彼女の体をもつとスマートに見せた。

シックなコートとのアクセントが絶妙だ。

横美祢先生は、ヒール九センチのショートブーツを履いて、胸をはつて、上品に歩いてくる。

繁華街のじつた返す歩道で、道行く人々は、一人に道を譲つている。

やばい！ あたし、完全に場違いだ！

紗枝は踵を返して帰ろうと思つたが、しつかり一人に腕をつかまれた。

「紗枝さん。今、逃げようとしてませんでした？」

「ひつ」

意地悪な笑みで、横美祢先生が紗枝の耳もとをくすぐつた。

紗枝は、彼女の口から、蛇の舌がちろちろと出ているように思えた。

ぎやー、エステで見るより、小悪魔キャラだ！

紗枝は泣きそうになりながら、苦笑いをみせ、懇願した。

「えーん、お二人様。そんなによらないでくださいー！」

「あたし、みずぼらしく見えちゃうよー」

「ふふふ、なんせ、『紗枝さん、スカートはかせよー』『計画のために、

横美祢先生と短いスカートを選んではいてきたんですから』

店長は微笑んで、腰をくねらせて見せた。

周りの男が、ざわつとした。『店長に釘付けになつた。』

店長は媚態をおびて、彼らを一瞥した。

濃いリージュの塗られた唇の口角が、綺麗に持ち上がつた。

「店長！」

紗枝はなぜだか恥ずかしくなつて、店長を守るよひに、男の目からガードした。

そしてそのまま一人を百貨店の中に押し込んだ。

「真面目にいきましょう。

今日はあたしの買い物に付き合つてもらひえるんですね？」

紗枝はゼーゼーと息を切らせて、店長にいった。

「もちろんですよ

店長は可笑しそうに微笑んだ。

「ではでは、レッツ・ショッピングー！」

横美祢先生が、ハイキングに出かける子供のようこ、百貨店の奥を指差した。

*

一階の奥はランジェリー売り場だつた。

まずはそこで、紗枝の女度をアップさせよつといつことになつた。

「てか、彼氏もいないのに、何でまず下着からなんですか？」

紗枝は、呆れと照れを入り混じらせて、きいた。

「何いつてるんです紗枝さん。女は下着から綺麗でなくちゃ」

横美祢先生はびしりといつた。

「そうよ、紗枝さん。いつ何時チャンスがあるのか分からないんだから」

「コートを脱いだ店長は、上下黒の、カーディガンとスカート姿だった。

店長は魅惑的に微笑み、パンティラックから、これまた黒のレスのパンティを広げた。

「もう店長。あんまり浮氣してると、旦那様が怒っちゃいますよ」

横美祢先生がしたためた。

「えっ！？ 店長結婚してるんですか！」

紗枝は思わず声を上げた。

ランジェリー売り場の店員が、一いちらを振り向いた。

紗枝は口を紡いだ。

「そんなに驚き？」

店長はきいた。

「そりゃもう」

紗枝はうなづいた。

「所帯じみてませんか？」

「ええ！ そりゃ、もう！」

店長が泣い顔を見せた。

「ち、違います！ 大丈夫ってことですよ」

紗枝は大慌てで、補足した。

そして紗枝は腕を組んだ。

「ううん。しかし、店長は結婚してもこんなに綺麗で……

それじゃあ世の妻は、「あれ」でいいのか？

紗枝は実家の母を思い出した。

テレビの前で寝転んで、煎餅をむさぼっている中年太りの母の姿

が目に浮かんだ。

「紗枝さん、結婚したからって、女やめぢやダメですよ
店長が、紗枝の思惑をくみとるようにしていった。
「いつまでたつても綺麗でありたいですものでしう」

「はい、その通り」

紗枝はますます店長を尊敬した。

「はーい、紗枝さん。これなんかどうですか?」
横美祢先生が、紗枝に下着を一枚見せた。

淡いピンクの、紐パンティ。

「はきません!」

紗枝は真っ赤になつて、それを捨てた。

三人は店員にしかられた。

第十五話 男にたいする審美眼

それから三人は、ヤングファッショソの階にいった。

紗枝は、一人がオススメする服を、とりあえず何着か試着してみた。

二人は紗枝に、とにかく女の子らしい服を着せた。

試着室から出てきた紗枝をみて、横美祢先生が手をたたいた。

「ほら、紗枝さん。このプリーツスカート、とってもよく似合いますよ」

「ほんとう。紗枝さん、よく似合ひますよ」

店長はいった。

「ほんとですか？」

脚の太さが気になつて、紗枝は膝上のプリーツを、無用に引っ張つた。

鏡に映る自分の脚は、やはり、太い大根にしか見えなかつた。
「紗枝さんは自分で思つてゐるより、ずっと脚も綺麗ですよ。

これくらいはかなくてどうするんです」

横美祢先生が真面目な顔でさとした。

「ほんとですか？」

「ほんとです」

二人はこくこくとうなずいた。

一人の説得のおかげで、紗枝はプリーツスカートと、それに似合うブーツ。そして首もとのあいたブルーのセーターを購入した。試着室でそれらを一通り合わせてみたとき、紗枝は自分の変身ぶりに驚いた。

「すごい……あたしじゃないみたい」

「ねー、だからいつでしょ。紗枝さんは綺麗になれるつて」

店長は、横美祢先生と目を合わせていった。

「本当、可愛いですよ、紗枝さん」

横美祢先生も大満足な顔をして紗枝を褒めた。

そして二人は「ダイエット成功のお祝いだ」と、洋服と靴の代金を払ってくれた。

「ええ、悪いですよそんなの！」

紗枝はあわてて、断つた。

「いいんですよ。

これからも、このスカートのウエストがゆるくなるくらいまで、がんばりましょうね」

店長はワインクして、財布の中からお札を出した。

紗枝は顔を赤くして、一人への感謝で胸をいっぱいにした。

*

買い物を終えて、紗枝はお茶だけでもおじる、百貨店のカフェに一人を誘つた。

三人がカフェに入ると、店員もお客様も一瞬動きを止めて、一人の美女に釘付けになった。

紗枝は両脇にいる二人を見つめ、自分も早くこんな風に綺麗になりたいと思った。

ハーブティーを飲みながら、三人は美について、長くおしゃべりをした。

「それにしても、店長。今日のランジョリー売り場、やつぱりライ

ンの型がしつかりしてないですねえ」

残念そうに横美祢先生がいった。

「本当ねえ」

頬に手をあてて、店長はいった。

「え、ですか？」

紗枝が尋ねた。

「やつぱり、ラインを綺麗に作る、補正下着と比べるとね」

横美祢先生が溜息をついていった。

「補正下着つて、あの、ガードルとか、鎧みたいなブラジャーとか

？」

「鎧つて、紗枝さん。コルセットといいましょうよ」

困った顔で横美祢先生は笑つた。

「最近の補正下着は、冬場は暖かいし、夏場がむれなくて、快適なんですよ。

全然苦しくないんですよ」

横美祢先生は浅刺としていった。

「本當ですか？」

いぶかしげに紗枝は笑つた。

彼女は実家でよく通つた銭湯を思い出した。太つたおばちゃんが、肌色のダサい補正下着をつけている。

「でもいくら性能がよくなつたつて、服の下は見せられない姿でしょう？」

紗枝は皮肉めいていった。

「そんなこと無いですよ。だつて私たちも今、着てますもん」

「え？」

「ほら」

ざわつ！

カフエで、彼女がいる男性までもが、そちらに釘付けになつた。

横美祢先生は脚を組んだままスカートを持ち上げ、ちらりと、バラの柄が入つたピンクのガードルが覗いた。

「私も、ほら」

店長がいった。

「おお！」

周りで嘆息の声があがつた。

コートを脱いでいた店長は、カーディガンのボタンを外し、勝負下着でも通用しそうな、黒の補正ブラをチラ見せした！

紗枝は両手を上げて一人を止めた。

「わー、分かりました、納得しました。いいからそれを隠してください」

「一人はスカートを下げ、ボタンを留めた。

周りから、「ああ～」という溜息がこぼれた。

紗枝はぐつたりしてうなだれた。

「しかし……本当に綺麗ですね」

紗枝は落ち着きを取り戻し、確かに綺麗だったと、補正下着の美しさを認めた。

「でしょ。エステの世界は日進月歩です」

横美祢先生はいった。

「店長や先生って、そんなに綺麗なのに、常に努力を怠つてませんね」

紗枝は感心していった。

「それはもちろん」

店長はいった。

「自分磨きは一生ですもんね」

「そう、私も」

横美祢先生はいった。

「すごいですねえ。そりやもつ昔から男性は引き手あまたですよね」

紗枝は感心していった。

「そんなこと無いですよ。

それに、昔はもつと太かつたし」

横美祢先生はぺろりと舌をだした。

「えー」

「大学生の時、手痛い失恋をして、それでエステに通うことになったんです」

「そうなんですか？」

紗枝はびっくりしていった。

「そのままエステの世界に惹かれて、こうやって仕事にまでなっち

やつたんですけど

横美祢先生は朗らかに笑つた。

「私が新入りの時に、ミネちゃんを担当したのよね～」

店長が懐かしそうにいった。

え。じゃあ店長つて、今いくつなんだろ？

紗枝は気になつてしようがなかつたが、そこはあえて流しておいた。

横美祢先生は続けた。

「エステに通つて綺麗になつて、初めて分かつたんだけど、入つて本当に外見で他人を判断するんだなあつて思いました」

「それつて……」

紗枝は言葉を詰まらせた。

「振られた相手は、私が瘦せて綺麗になると、急に手のひら返しちやつて。

『やつぱりお前が忘れられない』つて。あつーく手を握られちゃいましたよ。

そしてそのまま、私たちは

横美祢先生は両手の人差し指を、一方向に突き立てた。

「ああ」

紗枝は顔を赤くした。

ベッドインか、大人だあ。

「でも、私。それから彼の事が全然ときめかなくなつて

「ええ？」

「それで、三日もたたずに、お断りしました

「そうなんですか」

三日。微妙な期間だな。

横美祢先生は続けた。

「だつて、瘦せたからつて手のひら返す男なんて、ちちちやいじやないですか。

それに気付けたのは、自分が綺麗になつたからです。

綺麗になる努力をしなかつたら、他人をひがんでばかりでした」「つまり……そういう経験で、先生は人を見る目が変わつたつてことですね」

「そう」

横美祢先生は、につこり微笑んだ。

「それにあたし、二十一歳まで付き合つたことなかつたんですよ。初めての相手がその男だつたんです。」

そしてその後、最高の彼氏に出会つて、今も、ラブラブです」

横美祢先生は子猫のようく微笑んだ。

「えー、こんなに綺麗なのに、二十一まで彼氏がいなかつたなんて」「紗枝さん、人の出会いいつてのは、そういうものなのですよ」

店長は、しみじみと頷いていつた。

「紗枝さんも、これから、もつといい人に出会えますからね」

横美祢先生は、微笑んでいつた。

紗枝は、その言葉に、どきりとした。

第十六話 あなただけの beautiful (ピューティフル)

もつといい人……

「あたしは……あたしをフツた彼を、もう好きじゃないんでしょうか？」

紗枝はいった。

その質問に、一人は黙った。

横美祢先生は、ちょっと首を傾げて、困ったような顔で、ふつと微笑んだ。

紗枝は急に胸が、きゅうとなつた。

店長の方を見ると、店長も微笑んでいた。少し、憂いに満ちた目だった。

紗枝は、そのとき、なぜだかとも、寂しくなつた。

紗枝はどうして自分が今、こんなに寂しいのか分からなかつた。

待つて。あたしは、大崎君を見返すために、エステを始めた……んだよね？

紗枝は瞬きをくりかえし、どこに目をやればいいのか分からず、じつと目の前の紅茶に視線を落とした。

ハーブティーに映つた、自分の顔をじつと見つめた。

ねえ、あたしは一体周りからはどう見られてるの？

「自分を磨けば……周りを見る目も、養わっていくのでしょうか？」

紗枝はぽつりと尋ねた。

そして顔を上げて、一人に問い合わせるような表情で尋ねた。

「その、つまり、今までの恋愛とは違った恋愛が、できるようになるんでしょうか？」

「それはその人の、これから意識の問題ですよねえ」

横美祢先生はいった。「どれだけ綺麗な人でも、たまにすぐ子供な人つでいますからね」

「外見を磨いているだけじゃ、ダメってことですね」

紗枝はいった。

「そうですね。

やつぱり、人間として成長するのは、外も内も磨こうとする意識と努力にかかっていると思いますよ」

横美祢先生はうなずいた。

紗枝もなるほどと、うなずいた。

「そうだよね。磨き方も大事なんだ。あたしも眞に「内面も外見も綺麗だね」って言われる人になろう。」

「そう、まさにアンジェリーナ・ジョリーのようなボディに、サンドラマ＝ブロックのような性格を！」

いつもの癖がでて、紗枝は妄想を膨らませて、にやりと笑った。それを見透かすように、店長が微笑んで、紗枝の右肩をたたいた。「紗枝さん、この前、私は『見た目は大事だ』って言いましたよね」店長が尋ねた。

「はい、覚えてます」

紗枝はいった。

「そこでね、ちょっと誤解して欲しくないことは、見た目も大事だけど、世にもてはやされる、いわゆる『美人』を目指すことが、大事というわけではないんですよ」

「どういうことですか？」

紗枝は戸惑いを隠せなかつた。

「人それぞれ、味のある外見を持っていますよね。

それを自分なりに磨いている人を見ると、『ああ、いい外見を保つてるなあ』と思うんですよ。

かつこいいなあと思います。本人の心構えが、外見にこじみ出できているからですね。

だから私は外見にも気を使います。私なりに、ある程度潔く、着飾らない服を好んだり、私に似合うメイクがいいなあとか思つたりしますもの。外見を整えると、精神も整つてくるんですよね

そこまで言われて、紗枝は気付いた。

「つまり、自分なりの綺麗さを見つけるって事ですか？」

「そう。見た目を大事に、個性を大事に」

店長はにつこり微笑んだ。

「そうしたら、自然に自分に合つた人があらわれるんですね」

横美祢先生は嬉しそうに微笑んだ。

「あらゆる面で、見た目つて、人をあらわす鏡ですよね」

横美祢先生の言葉に、店長は納得するようにななづいた。

そつか、そつなのか。

紗枝は自分の美意識の未熟さに反省しながら、感動していた。どきどきしながら、紅茶にうつる自分を見つめた。今までよりも、自分を大事にできそうな気がした。

すじい、「外見」のイメージが、どんどん変わっていく。

紗枝は胸をときめかせながら、そう思つた。

店長はいった。

「だからね、私たちは、お店に来てくれるお客様全員、外見も内面も綺麗にしてあげたいなと思っていますよ。

紗枝さんご存知ですか？ ビューティフル beautifulって単語は、肉体

にも、精神にも使われる形容詞なんですよ」

「へえ、ほんとですか」

「“beautiful mind”っていう映画もありましたし。

体と心は切り離して考えるものじゃないですよ。両方高めていきましょう」

「そうですね！」

紗枝は握りこぶしを作つて大きく返事した。

「コースはまだまだ始まつたばかりですからね。このままもつと綺麗になつていこうね」

横美祢先生もガツツポーズをしていった。

「はいっ

紗枝は満面の笑みを浮かべた。

ほんの少しだけ、大崎君への思いで、胸をちくちくさせながら……

第十七話 寂しさの理由

店長と横美祢先生と別れ、紗枝は一人マンションに帰った。ベッドの上で、今日買った服と靴を眺めた。

それは、今まで紗枝が似合うとも思っていなかつたものだつた。でも、それが似合つと、彼女は知つた。

自分が、少しずつでも、変わつてゐる気がした。

「…………」

紗枝はベッドの上で考え込んだ後、思い切つたように、大きくうなずいた。

翌日、学校の講義がある一時間前に、紗枝はマンションを出た。いつものようにジーンズをはいて、パーカーを着る ところを、その日の彼女はしなかつた。

大学の最寄り駅まで、電車で三駅。

同じ車両に乗つていた、見知らぬ男の子数人が、紗枝をちらちらと見ていた。

紗枝はそれに気付いたけれど、自意識過剰になつてゐるのだと自分に言い聞かせた。

大学の構内に入り、階段近くの掲示板の前に来たとき、紗枝はエミを見つけた。

エミは掲示板の前で試験内容のメモをとつていた。

「エミ」

紗枝は彼女を呼んだ。

呼ばれて、エミが紗枝に気付いて、後ろを振り向いた。そして、

びっくりして声をあげた。

「わあ！ 紗枝ちゃん可愛い！」

昨日買った、チェックのスカートとセーターを着た紗枝は、頬を少し赤らめて、微笑んだ。

「す、」「い似合つてるよ、ジーンズよりいいよ」

HIMIは、きやつきやつとはしゃぎ、紗枝の服を褒めた。

「ありがと」

紗枝は顔を赤くして、お礼をいった。

「授業、HIMIも次？」

紗枝はきいた。

「ううん、あたしはこれで終わりなの。紗枝ちゃんは次？」

HIMIはいった。

「ううん。午後から。お昼食べてから行こうと思つて」

「そつかー。残念。一緒にお昼食べれたらよかつたね。私、もう帰らなきやいけないんだ」

「うう」

「あ……ねえ紗枝ちゃん。何か瘦せた？」

紗枝の耳元で、HIMIがささやいた。

「あー、うん。見える？」

「分かるわかる。すごいねー、冬場つて、動かないしつぱい食べちゃうし、太りがちになっちゃうのに」

HIMIはぴょんぴょんはねて、うらやましい、といった。

紗枝は黙つて微笑んだ。ありがとう、とまたいった。

HIMIと別れて、紗枝は食堂にいった。彼女とすれ違う男子学生の何人かが、振り返つて紗枝を目で追つていた。

紗枝はお茶を汲み、学食のおばさんに注文を告げた。定食が出来るまで、カウンターの前で立つて待つていた。

ミースカートとブーツの間に覗く、細い脚を、食堂の男子学生がそれを焦がすように見ていた。

紗枝はその視線に気付いていたが、無視した。

まだ、見られることの快感より、恥ずかしさが勝っていた。

そのとき紗枝は一生懸命、恥ずかしいのを抑えてスカートをはいていたのだ。

そして紗枝は食堂の隅のテーブルについた。ようやく一息ついて、紗枝は自分の脚をテーブルクロスの下でなでた。

とても不思議な感じが紗枝をつつんでいた。

ようやく紗枝は、自分が外見にコンプレックスを持たなくなつてきていることに気が付いた。

ゆっくりお昼をとり、食堂を出る頃には、紗枝は落ち着きを取り戻していた。

教室に行くため、階段を上がった。

上がりきったとき、紗枝はどきりとした。

向こうの廊下を歩いている男子学生の団体の中に大崎君がいた。

大崎君が一人、階段を降りようと、こちらに向かってきていた！

紗枝は、階段の前で、立ち止まつた。

横を向いていた大崎君が、こちらを向いた。

彼の表情がぴたりと止まつた。

紗枝は、真っすぐに大崎君を見つめていた。

スカートと、セーターと、ブーツを履いた女の子が、彼女をフツた好青年を見つめていた。

大崎君も、目をそらさずにいた。無表情で紗枝を見つめた。

そして、大崎君は眉をひそめて、ほんの少し悲しそうに、微笑んだ。

紗枝は、大崎君のその笑みを見て、一気に肩の力が抜けた気がした。

ゆっくりと、紗枝は歩いていった。大崎君の方に向かつて。

大崎君も、紗枝の方に向かつて歩いてきた。

二人の距離が縮まつた。

すれ違うとき、紗枝は何も言わなかつた。顔をそらすことも無かつた。

ただ、前を向いて、紗枝は歩みを止めなかつた。

大崎君に声をかけることは、無かつた。

紗枝が大崎君の横を通りすぎたとき、小さな声が、後ろで聞こえた。

「よ」と、大崎君のつぶやく声が。

紗枝は、一瞬歩みを止め、黙つて微笑んだ後、「や」とだけ、返事をした。

後ろは振り向かなかつた。背中で、大崎君の足音が階段を下りていくのが聞こえた。

教室に入つて、紗枝は適当な席についた。授業開始五分前で、まだ教授は来ていなかつた。

紗枝は息をはき、目を細めて教室を眺めた。風が、全身を通り過ぎたような気がした。寂しいかな、と紗枝は思つた。

もう、失恋に引きずられることはないのだと分かると、それはそれで、彼女はちょっと寂しかつた。

昨日、百貨店のカフェで、紗枝が感じた「寂しさ」とは、「うう」とことだつたのだ。

まあ、まだ完全に失恋の痛手が消えたわけではないけどね。

紗枝は思つた。今もやつぱり、失恋の辛い思い出が顔を出して、紗枝をちくちくと苦しめていた。
彼女は少し眉間にしわを寄せた。

でも、もう、夢には出ないかな。

紗枝は静かに目を閉じ、今の気持ちをゆっくりと味わった。

第十八話 恋は筋トレ

一月末。

テストもレポート提出も終わり、学生たちは大きく背伸びをして、二ヶ月間の暇をもてあそぶ春休みへと突入する。

「はい、確かにレポート受理しました」

事務の窓口で、職員が提出用紙に判子を押す。

「ありがとうございます」

栄次は嬉しそうに、いった。

締切日ぎりぎりのレポートを提出だつた。

栄次はやつと、ほつと一息ついて携帯のメールをチェックした。

「あ」

紗枝から「今年度お疲れ」メールが入つていた。

『テストお疲れさん レポートちゃんと出したか?』

ふつと笑い、栄次は返信メールをうつた。

『おおサンキュー、そつちもお疲れさん。てか、学校あんま来てなかつただろ』

『うん、テスト以外ほとんど行つてなかつたな。栄次は今学校?』

『おう、今帰ると。紗枝、学校いるの?』

『ううん、違うよ』

「……」

聞かずに入門を切るのも一興かと思ったが、栄次は紗枝のうながしに応えてあげた。

ま、どうせエステだろ、また。はまつてますなあ。

栄次は微笑んでメールを打つた。

『へへ、てか、どこにいんの?』

『スポーツジム』

なんすと。

返信メールには書かなかつたが、書きたかつた。

*

「あ、え～いじ」

一日体験分の料金を払い、ジャージに着替えた栄次は、マシーン

ジムに囲まれて汗を拭いている紗枝の姿に見つけ、眉を寄せた。

「え～と、君は一体、何になりたいのかな」

レッグプレスを押す紗枝の隣に立つて、栄次は娘をさとすよつて、

彼女に尋ねた。

「綺麗になりたいのよ」

紗枝はいった。

栄次は半分呆れて、呆れながらも紗枝に感心した。

「いつからジムに通い始めたの?」

「う～んと、十日前かな」

ぐぐつとマシーンを押しながら、紗枝は栄次を一警いちべつした。

「店長にも聞いたらね、軽い負荷での筋トレとか有酸素運動なら、全然やつていいくて。

ただ、あんまり重い負荷で筋トレすると、また筋肉がこわばっちゃうかもしないから、それは控えるつて『トでね』

「すごいなあ、エステにスポーツジム。それつて理想の痩せ方かもなあ」

「え、ほんと。いやん嬉しい」

おほほと紗枝は笑つてみせた。

紗枝のほころぶ顔を見て、栄次は微笑んだ。そして、もう一度紗枝にいった。

「そんなんに、あいつが、好きなの？」

「それ、店長にも聞かれた」

唇をとがらして紗枝はいった。

「ふつ、マジで。てか、そりゃ聞きたくなるよ」

「あたしがいつになくダイエットに頑張るから?」

「ま、ね」

栄次は、胸の奥の複雑な心境は隠したまま、紗枝の言葉の続きを待つた。

「人つてのは、ある日をきっかけに変われるもんなのよ。

あたしは大崎君がきっかけで変わろうと思えたの」

「ほう」

「それにねえ」

そこまで言って、不意にマシーンを離して、紗枝は次のマシーンに移動した。

「? 何だよ?」

栄次も紗枝を追つて、隣のマシーンに座った。素人並に、プルアップを扱つてみた。

「言われたのよ」

「?」

「告白したとき……つまり振られ文句よ」

「……何を言われたの?」

栄次は聞いた。

「『妥協はしないと決めてるから』って『
がつこん。

人の力が離れたことで、プルアップは大きく揺れて、フロア全体に金属音を響かせた。

それだけ言って、紗枝はさつさと更衣室に入つていつてしまつた。

栄次はそこに取り残された。

マシーンのサドルに座つたまま、つぶやいた。

「キツツー……」

慰めの言葉は思いつかなかつた。

最終話 追加注文

ジムの近くの喫茶店で、紗枝と栄次は話しこんだ。気温3度の外から暖かい室内に入つたからだろう、紗枝の頬はピンク色にそまつていた。

そんな紗枝を、栄次はただ見つめていた。

紗枝はハーブティー、栄次はココアを頼んだ。

ジヤージや靴が入つて、大きなボストンバッグを蹴りながら、紗枝はいった。

「あたしのコト、大崎君は好きじゃなかつたのよ」

「あんま思い返すなよ」

痛々しくて、フォローに困る。

栄次は胸をキリキリさせた。

「だつて、妥協はしないって」

栄次は、ううつと言葉つまされた。

「それは向こうに問題があるんだつて」

「そんなことないよ。だつて恋愛つて相互関係でしょ？」

紗枝は、真顔になつていった。

「う、ま、そうだな」

栄次もそれには同意した。

「気が合わなかつたのかなあ。けつこう話して、みんなで遊びにも行つてたけど……きつと何かが足らなかつたんだなあ。

人の価値つて、外見だけじゃないつて、エステで教えられた。

だから、なおさら次好きになる人には、外見も内面も、もつと綺麗になつて出会いたいと思つたの」

「大崎にじやないの？」

栄次がいった。

「え？」

きよとんとして、紗枝は顔を上げて栄次を見た。

「大崎に会つたために綺麗になるんじゃなかつたのか？」

「大崎君にはもう会つたよ」

紗枝はいつた。

栄次は、なぜか胸がざわついた。

「へえ、そう」

つとめてそつけなく栄次はかえした。

「うん」

目を細くして、紗枝は静かに微笑んだ。

「もう、いいのか？」

「……うん」

紗枝はいつた。

「これからは、新しい自分のためにがんばるの。新しい自分と、新しい人のために」

「……前向きだなあ」

栄次が言葉をこぼした。

「そう？」

紗枝が笑つた。

「失恋者のたわごとですよ」

「そんなことないよ」

栄次は真摯しんしにいつた。

「もちろん、誰かと付き合つことになつても、ずっと努力は怠らな
いよ。

美に終わりは無いんだから」

紗枝は嬉しそうに、ふふつと笑つた。

「ふむふむ」

栄次はこくりと一口ココアを飲み、唐突にいつた。

「彼女と別れた」

それは紗枝を驚かせた。

「……どして」

真顔で紗枝は聞いた。

「どしてって」

栄次は返事に困った表情を見せた。

「いや、ああ、そうよね、ごめん！」

慌てながら、紗枝は栄次に謝った。

「でも……何でよ、ほんとに」

紗枝は少し、寂しそうにいった。

「ほんとに何ででしようねえ。最初、メールで『もう別れよ』とかいわれるし」

「はあ何それ、面と向かっていえっちゅうに」

啖呵をきつて、紗枝は、呆然とした栄次を見てはっとした。

なんにしても栄次に失礼な発言ではないか。紗枝はしゅうんと小さくなつた。

そんな紗枝を見て、栄次は少し笑つた。溜息をつき、テーブルに頬杖をついた。

栄次はいった。

「いや、ほんと、俺もそれは氣分悪いからさあ。直接話して、ちやんと別れたんだよ。

何かなあ、どうも俺といふと、つまんなかったらしくて」

「あたしはつまんないよ」

紗枝が勢いこんでいった。

栄次はきょとんとして、紗枝を見つめた。

は！ またやつた。

慰めがまったく慰めになつてない氣がして、もう紗枝は、うつむいて黙ることにした。

ばか。じりじり、お口にチャック！

栄次はちょっと困ったようにして、笑つてみせた。

「まあねえ、俺も俺だよ。彼女が出来たからつて、別段、オシャレする気も無かつたし。

なんとなく、いてくれていいなあつて、思つてたんだけどねえ……

「ういうのも、相性の問題だつたつて言つのかなあ」

「…………」

「俺も、紗枝みたいに、外見をもつともつと磨いておいてれば、続いたんかねえ」

前置きなく、栄次は紗枝に、一人の男として尋ねた。
頬杖をついて、紗枝を覗き込むようにして見ながら、栄次はささやいた。

「女ってさ、隣においておく男が不細工だったら、耐えられないってホント？」

「どこからそんな情報入手したのよ」

苦い顔をして紗枝はいった。

「どうなの？」

「人それぞれなんじやない。

恋愛中は、言葉なんていらないって、はつきり言つ子もいるし。
でもあたしは、話せなきや嫌だし、別に外見はそれほど、だよねえ。

話して、すつ”い楽しくて、それで好きになる”ことの方が多いもん。

だから、人それぞれ

「ふうん」

栄次はうなずいた。ココアをもう一口飲んだ。

「そのままいいのにねえ」

紗枝がつぶやいた。

彼に、そつとつぶやいた。

「…………」

栄次は、ココアをソーサーの上に戻して、じつと紗枝の顔を見た。

「本気で言つてる？」

「茶化す理由がどこにあんのよ」

紗枝が少し、むつとした表情で栄次をたしなめた。

栄次は笑つた。

それは、はにかみ笑いとも、苦笑ともとれる笑みで、そして栄次

はウェイトレスに、コーヒーを追加注文した。

紗枝はそれを、頬を赤らめて見つめていた。

「もう少し話そうよ」

栄次はいった。優しく、まどろんだ笑顔だった。

窓の外は、かすかだけれど、粉雪が舞っていた。

外を歩く人から見れば、喫茶店のガラス張りの壁の向こうの楽しそうな二人の姿は、どうしたつて恋人同士にしか見えなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9092d/>

外見ファクター～エステヘゴ～

2010年10月8日12時40分発行